'Leaves of Grass' にみられる「愛」の本質について

稲　垣　春　男*

The Essence of "Love" Seen in Leaves of Grass

Haruo INAGAKI

要　旨

「草の葉」*Leaves of Grass* を中心にして，W. ホイットマンの理想とした，創造的にして救済的なる「愛」の姿をとらえてみたい。

大自然への愛，男女両性の愛，母性愛，そして僚友愛という階梯を攀じ昇り，宇宙(コスモス)の核心に迫る彼の民主主義的にして宗教的な「愛」が我々に示してくれる今日的意義を考察する。そこにはアメリカ的であると同時に，世界的規模(スケール)をもった「愛」の厳粛な姿がある。

Synopsis

The purport of this treatise is to figure out the creative and redemptive "Love" which was the ideal of Walt Whitman throughout his life. So, our duty is to consider the present-day importance of what his "Democratic Love" indicates.

His "Love" aims to reach upward to the center of the cosmos, ascending each step of the love of great nature, amativeness, maternal love and comradeship, with increasing force and deepening religious hue. Here we find the solemn form of "Love," which has at once American and worldwide scale and expands dynamically ont of his bosom.

目　　次

〔序　論〕
(1) Whitman, a Kosmos
(2) *Leaves of Grass* の表題としての意味
第1部　Love for Nature
(1) Paumanok, Mannahatta and Camden
(2) American Continent
(3) World and Kosmos
第2部　Amativeness
(1) Children of Adam
(2) その他の詩篇
(3) 完全なる母性
第3部　Adhesiveness
(1) Calamus
(2) その他の詩篇
(3) Whitman の人間関係
〔結　論〕
(1) 愛の宗教性と救済性
(2) 民主主義的愛

〔序　論〕

W. ホイットマン (Walt Whitman) の「草の葉」*Leaves of Grass* は，彼をして「世界の詩人」(a World Poet),「世界文学」(World Literature) のスケールの人として確立させている代表作である。この「草の葉」を車にたとえるなら，彼という偉大な自然人を心棒とし，明鏡のように澄んだ死生観と，広大無辺の "Love" を両輪としてたくましく前進している趣きがある。

当時のアメリカは1776年の13州の独立宣言以来，1791年の新首都 Washington, D. C. の創設など，建設の地歩全く成り，政治に科学に国運の隆昌は目覚ましかった。また1848年の California における金鉱発見により the Gilded Age[1] が出現した。全土にわたる鉄道業の発達，そして南北戦争後は南部の農本主義を破った北部の産業主義が西部に進出し，物質的繁栄のテンポは目を見張らせるものであった。「商業」(business) は一切を呑み込む現代語となり，「勘定に合いますか。」(Does it pay ?) の声は喧(かまびす)しく，拝金宗の徒が続出した。

ホイットマンは当時の状況を，「金儲け」が魔法使いの蛇のように，ほかの蛇を食いつくして業界に君臨するありさまとして，「民主主義展望」(Democratic Vistas) の中で述べている。

The magician's serpent in the fable ate up all the other serpents ; and money-making is our magician's serpent, remaining today sole master of the field.[2]

* 助教授　一般教科

かかる憂うべき思潮の中に，講演に文筆に広範な活躍を見せた Transcendentalism の思想家，R. W. エマソン (Ralph Waldo Emerson) につづいて金銭に恬淡たる詩人，ホイットマンが出現したのである。この平服平食の詩人が示した壮大なる格調は，国の内外の精神界の要請に十二分に応え得るものであった。

ホイットマンの死生観 (thanatopsis) については，死を生の収穫とみる，東洋的というよりも世界的，宇宙的スケールをもった永劫回帰性 (Ewige Wiederkunft) を根底とせるものとして，以前に述べてあるので，[3] ここではそれに相対峙する極として，彼の内界に脈脈として波打っている〈愛〉の本質を究明したい。

(1) Whitman, a Kosmos

一つの宇宙と自称した詩人の現実の姿として，22歳で「放浪者の哲学」を発表した風来坊 (vagabond) の彼を見落すわけにはいかない。「ローファー (loafer) とは何か。ローファーとはローファーである。」と彼は率直に言う。故郷ロング・アイランドの East Norwich で小学校教師としてスタートし，週刊紙 *Long Islander* の編集，発行に携わり，現実家として選挙運動に参加して失敗した彼は，三度転身して，ローファー，自然人，詩人として真の自己発見をした。

極度に自由を束縛されることをきらい，自然や素朴な人々に親しむことによって満たされたその放浪癖は，父親譲りのものであろう。「草の葉」初版の出た1855年，しかも同じ7月になくなった父 Walter は，スコットランド人で大工，百姓の仕事をしていた。我儘で癇癪持ちな彼は，一面7人の息子のうち3人に，Andrew Jackson, George Washington, Thomas Jefferson と，3代，初代，7代の大統領の名前をつけるほどのお目出たい空想家であった。ホイットマンは次子であったが，兄のジョス (Josse) が狂癲を起して1870年に死んでいること，父の名前を譲られていることなどからみて，幼少より大いに嘱望されていたものと思われる。

ローファーとしてのホイットマンを想うとき，我々は俳諧を民衆詩として，芸術として独立させた芭蕉を忘れることはできない。この俳号芭蕉自体がホイットマンの Calamus の連想をもたらしてくれる。「月日は百代の過客にして行かふ人も又旅人也。」と喝破し，漂泊の思いやまず，道祖神のまねきに応じた芭蕉もまた半生を旅にすごした人であり，ローファーであったといえよう。〈さび〉，〈しおり〉の理念に到達し，晩年さらに〈軽み〉の境地をとなえた芭蕉は，停滞をいとう放浪の人であった。1682年（天和2年），江戸の大火で類焼して以来，人生を火宅と観じ，一所不在の境涯を理想とした彼は，残された九州地方への旅路で客死している。芭蕉の辞世の句，「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」，[4] そして「更に創世紀の昔に溯ってもいい。あのアダムだってローファーでなくて何だとお訊ねしたい。」[5] と率直に言うホイットマン，まことに肝胆相照し合う二人と思わずにいられない。

ローファーは字義どおり怠け者のことだが，ただの怠け者ではなくて，緑児の素直さで自然に従う怠け者である。ホイットマンの自由への執着は挺子でも動かし得ないものであったが，彼がかかげたモットーのうちに，Evolution, Freedom の前提として Ensemble があったことは忘れられるべきではない。彼の loafing には〈統合〉，〈合一〉への絶えざる努力の裏付けがあったのである。ここに〈一つの宇宙〉，〈宇宙の子〉たるホイットマンの所以が存する。

外界の宇宙の存在と，生気を付与された内界の自己は一体であり，同じものであることが実感される。経験界の基底にある自己の真の実在や，外界の宇宙の本質なるもので充満され，私の自己は一切の自己となり，「君達にそなわる美質のように，すべての原子が私に所属する」境地に昇格する。(For he who knows his "actual self"—the reality beneath his empirical being—knows himself to be the permeating essence of the cosmic existence outside, because his own self is the self of all, "every atom belonging to me as good belongs to you.")[6] かくてホイットマンは全宇宙に合体した自己を悟るのである。

「自己の歌」(Song of Myself) の第48部においてウォルトは，神もふくめて何物も自己以上に偉大でありえないことを断言する。(And nothing, not God, is greater to one than one's self is.) 個は絶対者と時代を等しくし，永遠に共存し，至高の地位にある大宇宙の各粒子に調和することこそ真に自己の信条である。(A true doctrine of self is that which holds that the individual is coeval and coeternal with the absolute and accords to every particle of the universe the status of the supreme.)[7] エマーソンの「大霊」(Over-Soul) が歴史をそれ自体の伝記として受けとめるのに対して，ホイットマンの「自己」(Me myself) はより積極的にそれ自体の伝記をもって歴史を形成するのである。「宇宙的記憶」(Cosmic memory)[8] と，

神のごとき先見をもって，過去に，未来に，自在に移動できるのである。*Svetasvatara Upanishad*[9] における「梵」と「我」の究極的一致を示す部分を引用すれば，「彼は唯一の神，萬物の中，萬象の中に姿を隠す，萬有の中の自己，凡ゆる業を晋く注視し，凡ゆる存在の中に棲む，保護者にして了知者，又物質を解脱せる唯一者」である。そしてここにこそホイットマンが親近感をもって東洋人に迎えられる本質があると思う。また彼の側からするなら，梵天王と仏陀の国，インドへの航路 (Passage to India) に霊魂を駆り立て．サンスクリットと吠陀以上の大地と大空の秘境の探究に向かわせた鍵があると思う。

(2) Leaves of Grass の表題としての意味

ホイットマンの人間としての多面性は，loafer, vagabond, bohemian のほかに，dandy, carpenter-Christ,[10] American bard, wound-dresser, bearded sage などいろいろの表現をとおして語られているが，「草の葉」の中で彼が反影させた自分の姿は，「アメリカ人，民主主義者，詩人そして予言者」(American, democrat,[11] bard and prophet) としてのそれであった。

この「草の葉」*Leaves of Grass* というタイトルについて，Leaves と複数になっている点，また Grass とは何のイメージかという点を日本語における連想を交えながら考察してみよう。

「草」(Grass) は，牛，馬，羊などの飼料となって，間接的に人間の生命を維持するものである。green, grow の cognate word であり，自然を愛したホイットマンの分身である。星雲説，進化論，地質学など近代科学の領域の中にあっても新鮮な存在たるを失わない，雄大な気迫に充ちた詩集のタイトルとして，〈草〉はそれ自体，星辰の運行に劣らぬ意味をもつものである。(I believe a leaf of grass is no less than the journey-work of the stars,—Song of Myself, § 31, 663)

日本語では兼好法師の徒然草，清少納言の枕草子の随筆集，さらには絵草紙，草双紙といった連想がある。印刷用語としての grass には「余り値打のない印刷物」という意味がある。[12] 一本の草 (a spear of grass) の素朴さを愛し，自然に生き，天然の美に浸った自然詩人の面影を髣髴させる。芭蕉の「奥の細道」にも，洗練された彼の至境とともに，草深きところを踏み分け，踏み分けといったイメージが伴う。

土地あるところ，水あるところに生える草，それは多年生 (perennial) であり，不断の生命の表象である。(The smallest sprout shows there is really no death,—Song of Myself, § 6, 126)

野に起伏する草，路辺に生うる草，それは日本語の青人草（あおひとぐさ），民草（たみぐさ）のイメージに対応する概念を内包しており，民衆詩人ホイットマンの詩作を集大成せるものに恰好のタイトルと言える。それは1855年7月4日，アメリカ独立記念日を期して出版された初版より，1891年2月付の臨終版（第10版）まで，推敲癖の彼にして，遂に一貫して変ることがなかった気に入りの表題であった。また彼の思想自体も一般に考えられている以上に不動のものであった。

Grass は，ホイットマンにとっては，集団の中にあって調和をたもちながら，しかも確然たる独立性をそなえた存在としての個人という，彼の democracy の中核的概念が図式化されたものである。(The grass thus becomes a grahic representation of Whitman's central concept of democracy—individuality in balance with the mass, distinguished singleness in harmony with massive grouping.)[13] これは叢生，族生といった Grass の成育の様態が暗示するものである。Dr. Richard Maurice Bucke がその著 *Cosmic Conciousness: A Study in the Evolution of the Human Mind* で言っているように，ホイットマンの詩材の中心となったのは，雑草のような表立たない階級，それでいて逞しい生命力をもった人間だちであったのである。

「葉」(Leaves) は，日本語の連想では，蓮つ葉女（下品でいやしい女），葉武者（こっぱざむらい），それにせいぜい固有名詞で樋口一葉，葉隠（鍋島藩の武士の修養書）などを挙げてみても，凡俗性，庶民らしさの語感は去らない。ただ紙を数えることばとしての〈葉〉は，(Single thickness of folded paper, esp. (=2 pages) in book) の意の leaf と語義を共通にしている。「草の葉」が初版の12の詩から成長して．第3版では詩群のフォームをもち始め，最終的には今日われわれが手にする15篇，402の詩をおさめた大詩集となっていることを考えると，Leaves の一語はさらに示唆に富んでいる。事実，Leaves of Grass は初版においては欄外見出し (running-title) ととして各頁にあり，表題なき12の詩を総括する体に見えたのである。

democracy がギリシア語の Demos=people, kratos=power の語源より生まれ，(popular government) とか (government by the people; esp.: rule of the majority)[14] の意となり，the democracy が (the

lower classes as political power) であることを知るとき，再び Grass=people のイメージが強調されてくる。Isaiah, XL の中にも "All flesh is grass." (6)，"Surely the people is grass." (7) などの表現が見られる。ホイットマンの "leaf" は，日本語の〈葉〉のように「草」(the blade of grass) と，O. Henry の *The Last Leaf* のような本来の「木の葉」(the leaf of a tree) との，二つのイメージを融合したものであった。そして Leaves は Grass (people) に対応するものとして，複数でなければならない。不断の生命をもって生え茂るべきものだからである。

× × × × ×

過去の堆積と古い大陸から躍り出た新しい詩人，ホイットマン！　彼がその生涯においていだきつづけた〈愛〉の本質は何か。その忘れ形見として遺贈された *Leaves of Grass* にみられる〈愛〉が純粋に指向したものは何か。結論的に言って，それは肉体の詩から霊の詩へと飛翔する過程において示される「僚友愛」(Comradeship)[15] であり，「民主主義的愛」(Democratic Love) であった。「ポウマノクを出発して」(Starting from Paumanok) は「銘詩」(Inscriptions) 篇のなかの詩であるが，その92行目で「草の葉」を「僚友と愛の福音の詩」(the evangel-poem of comrades and of love) と表現している。そして自らを「僚友の詩人」(the poet of comrades) と称している。(94行) この〈僚友愛〉，〈民主主義的愛〉は，同時に〈宗教的愛〉であり，〈救済的愛〉であった。今日のように競争意識のはげしい，しかもメカニカルで非情な世相のなかで，劣等感や社会的飢餓に悩む若者たちにとって，「草の葉」の詩は拒否的な性格を取り除き，健康な自己を力強く主張する活力を約束するものであろう。

R. M. バック博士は，W. D. オコンナーの「現代の予言者」(a modern prophet) としてのホイットマンの解釈を力強く確証して，「草の葉」こそ「民主主義の聖典」(the bible of Democracy) と言っている。

> *Leaves of Grass* belongs to a religious era not yet reached, of which it is the revealer and herald... What the Vedas were to Brahmanism, the Law and the Prophets to Judaism... the Gospels and Pauline writings to Christianity... will *Leaves of Grass* be to the future of American civilization.[16]

(「草の葉」はまだ我々が到達していない宗教上の一時代に属する書であり，その時代の啓示者であり先駆者である。婆羅門(ばらもん)教におけ吠陀(ベーダ)の経典……ユダヤ教における律法と予言書……キリスト教における福音書とパウロの書翰……そのような役割をアメリカ文明の将来のために果すものこそ「草の葉」である。)

近代文明の混濁における解毒剤，自然運動の槓杆(こうかん)としての民主主義文学を確立したホイットマン，そして「草の葉」の精髄として，「偉大なる個人を形成することにより大衆を形成する」ことを合言葉として高唱した現代のキリスト……。この過去と未来をつなぐ今日の詩人の立場に立つ彼の〈愛〉は，その自然観，世界観の規模からして偏狭なセクショナリズムを脱却して，同時的にキリスト的愛，イスラム教的愛，ヒンズー教的愛，仏教的愛となって「宇宙の本質としての愛」への道をたどったものと思う。

〈愛〉は精神的なものであるが，肉体的裏付けを待って，すなわち，霊肉一致の基盤に立ってこそはじめて健全であり，生生化育的であるといえる。人間の生命自体が精神的発展と肉体的成長のサイクルのなかで存続するからである。この点ホイットマンは，精神面の強調を主軸としたことは勿論だが，肉体的表出による愛情についても，そのオーケストラのように壮大な詩句の中で率直にふれている。健康と力を保持するために，この方面でとられた表現の自由性について，彼と Concord の哲人エマソンとの間に遣(や)り取りがあったことは有名である。

彼の〈僚友愛〉は adhesiveness としても示されているように，高遠な主義や行動への adhesion を念頭においた，太陽の暖かさに倣(なら)うもので，sexologist のいう homosexual love (sodomy) とは全く次元を異にするものと言えよう。一つの主義，主張が vital なものであればあるほど，それの生活への実体化，incarnation の役割り，を重く見たのである。しかし，今日の時点からすると至当と思われるこの率直性が，J. Harlan 内務長官の忌諱にふれてインディアン局の書記官の職を解任されている。開拓当初の原罪の意識はほとんど忘れ去られたとはいえ，ニュー・イングランド地方における Puritan 以来の潔癖過ぎる生活精神は，当時なお牢固(ろうこ)たるものであった。人々はこの詩集をただに「ローファーの寝言」としてはすまさず，それ以上の積極的な悪業，すなわち神聖なキリスト教道徳を破壊し，神を冒涜するものであるとした。実際は，内村鑑

三もその著「平民詩人」[17] で訴えている如く，彼こそは真に使徒パウロの如く「神に頼りて生き，又動き，又存在することを得し者」であったのである。そしてかかる偏見の存在が，同時代のアメリカ人をしてこの不世出の大詩人を正当に評価することを困難ならしめたのである。

彼における「僚友愛」(comradeship) は民主主義のもとで結束し合う同胞たちの badge であった。この〈僚友愛〉の前進するコースは功利性，打算性の羈絆を脱して宇宙の本質へとエリベートし，宇宙の空間を屈託なく飛翔するものであったが，一方危険を乗り越えるたくましい意志を必要とするものであった。

× × × × ×

第 1 部　Love for Nature

〈愛〉の問題を一般的に考察する場合，自然愛と人間愛に二大別し，人間愛を amativeness と adhesiveness というふうに更に分けてみるのも一つの方法かと思う。

アラビアンナイト全巻の読破など，文学に開眼した1830年以降，そして16歳のとき以来50年間彼の伴侶となった Walter Scott の詩集 1 冊，その他旧新訳聖書，オシアン，ホーマ，ニーベルンゲン，ダンテ，シェークスピアなどの大著述は，青空の下，青海原に面した原っぱや丘の上で味読されたものであった。「書はこれを読む場所に由りて其の価値を異にする。」と語り，室内の読書を避けて自然の境で読書をしたことは，彼の天然観，天然愛よりの要請に本づくものであった。動と静の世界を経験によって結合したといわれる「荒海や佐渡に横たふ天の川」，この芭蕉の句の境地を人間界と自然界の精神的結合によって力強く実現しているのが，ホイットマンの読書態度であるといえよう。15歳から18歳ころまでは文芸熱も高く，「よろずにこなす小説読み」と自分でいうほど乱読し，劇場にもよく出入した。シェークスピアの劇については特に興味があった。

大気の中にあり，大地と共に食いそして眠ったホイットマン！

> Now I see the secret of the making of the best persons,
> It is to grow in the open air and to eat and sleep with the earth.
>
> (Calamus, Song of the Open Road, § 6, 71—72)

ホイットマンの自然讃美は「自選日記」(*Specimen Days*) の各章にもあふれている。つぐみ，大鴉，青鳥，千鳥，駒鳥，山鳴，磯鳴や池鳴，野雲雀，むくどりもどき，烏，猫鳴き鳥など，種々の鳥群についてその飛びかい，そのメロディへのいつくしみがみられる。また一般人には雑草として無視されるもうずいか (mullein) の感触を楽み，金色の花の擬宝珠を眺める自然人の姿があらわれる。マリンは彼にとって大地のばら結び (rosette) であった。徹頭徹尾自然の法則に生きる彼の無邪気 (innocence) は，英詩人 William Blake に匹敵する。一見相違した存在に思われる二人は，神のような無垢に生きる点で魂の兄弟と言ってよい程似ている。宇宙の摂理にしたがって，もっとも真剣に自己を生かした点で二人は完全に一致している。ホイットマンの，ハーレイ (Harleigh) 丘の墓地にある墓のデザインは，ブレークの「死の扉」の構図を自ら選んで作らせたもので，彼のブレークに示した親近感がよくわかるのである。

詩人ブライアント (William Cullen Bryant) の愛した森，ワルデン (Walden) の小さき池は，すべての米国の山野とともに自由の風貌を宿していた。彼の眼は屋外に生長する一切のものに惹きつけられていった。

(1) Paumanok, Mannahatta and Camden

熊蜂，蟬，うまおい虫，杉，樫，樺，ぶな，栗，楡，ななかまど……これらの虫，樹木，そして泉，小川の示す教訓と魅力，澄み切った青空の安寧……そして，詩人の魂を形成してくれた海への情熱はとくに強かった。"A Winter Day on the Sea-Beach" (Specimen Days) を一例として取り上げてみよう。波のひろがり，灰白色のなぎさが，書物，談話，優雅などとは全く無縁でありながら，その空虚とも見える単純さによって，詩，絵画，音楽にまさったはかり知れない深さをもった存在となる。New Jersey の海浜における，冬の一日の述懐である。

> The attractions, fascinations there are in sea and shore! How one dwells on their simplicity, even vacuity! What is it in us, arous'd by those indirections and directions? That spread of

waves and gray-white beach, salt, monotonous, senseless—such an entire absence of art, books, talk, elegance—so indescribably comforting, even this winter day—grim, yet so delicate-looking, so spiritual—striking emotional, impalpable depths, subtler than all the poems, paintings, music, I have ever read, seen, heard.[18]

そしてこの sea-prairies のしわがれたささやき，健康によい空気，塩からい微風を直接，間接に体現する詩作こそが彼の祈念するところであった。

W. ホイットマンは1819年5月31日，ニューヨーク州 Long Island の Huntington の近くの West Hills の小村で生まれた。このロング・アイランドという島は全長118マイル，幅12ないし23マイル，面積1,682平方マイルで，エンパイア・ステイト・ビルディングから今日俯瞰されるように，ロング・アイランド海峡 (Long Island Sound) をへだてて，ニューヨーク本土とコネチカット州に面している。海岸線は280マイル，深い湾や入江が多く，天然の池，湖沼にも恵まれている。肥沃な土壌，そして海路はるかに吹き寄せる爽涼たる微風，まことに理想の島である。

「銘詩」(Inscriptions) 篇の「ポーマノックを出発して」(Starting from Paumanok) の冒頭で，

Starting from fish-shape Paumanok where I was born,
Well-begotten, and rais'd by a perfect mother,[19]

と紹介されているように，ホイットマンの生誕の地ロング・アイランドは，インディアンのつけた名称 Paumanok (あるいは Paumanake, Paumanack) が示すように，「魚の形をした島」である。この巨大な魚は，頭部をニューヨーク湾におき，尻尾を二つに分けて Orient 岬と Mantauk 半島に伸ばしている。また「自選日記」の中の「ポウマノックとそこで過された私の青少年のころの生活」(Paumanok, and My Life on It as Child and Young Man.) を繙くと，厚い氷の張った南側の湾でやす (eel-spear) をつかって鰻を捕ったり，夏の入江遊び (bay-party) で海鷗の卵拾いに興ずる少年ウォルトが登場する。John Burroughs のノートによると，1800年初頃のホイットマン家は頑丈な材木で建てられた中二階の農家であった。魚釣り，蛤取りなどで遠出するときは，男も女も馬に乗った。燃える薪が部屋を明るくするとき，談笑する家族の耳には遠く波の音が聞えていた。この故郷の岸辺を打つ波のリズムから，彼の "free growth of metrical laws" が生まれ，脚韻も律格もない純粋の自由詩が育っていったのである。それはかならずしも，詩人 S. T. Coleridge の定義する「最も美き言葉」による表現とは一致しなかったが……。

52部，1345行の長詩，「自己の歌」(Song of Myself) の第22部において，You sea！と呼びかけた彼の海への愛情はつぎの行につづく。

Cushion me soft, rock me in billowy drowse,
Dash me with amorous wet, I can repay you. (452—453)

自然の子ホイットマンは自然に報い得る子である。自然は人間自体に変貌して来る。そして自然と人間の一体化が完成する。

マナハッタ (Mannahatta) はアルゴンキアン (Algonquian) 語で，北米土人の間では "large island" の意味をもっていた。Washington Irving がその傑作，*A History of New York, by Diedrich Knickerbocker* のなかで一般化したこの Mannahatta は，ホイットマンの気に入りの地名で，New York は勿論，Manhattan にも代って彼の詩の中でも再三登場している。大体ホイットマンは，その「アメリカ語入門」における言語論で知られるように，アメリカ人の歴史を示し，民族の美しさをあらわしている土人の呼名そのままの，Mississippi, Ohio, Connecticut などの地名を愛し，Saint Lawrence, New Orleans などの非アメリカ的地名は好まなかった。その国独特の詩，独特の名称こそ彼の主張である。北海道の長万部（おしゃまんべ），苫小牧（とまこまい），斜里（しゃり），神居古潭（かむいこたん）などのアイヌ語系統の地名にわれわれが詩情を感ずるのと同類か。

「銘詩」の「毅然たる我れ」(Me Imperturbe) では，自然のうちに悠々として立ち，色々な生活体験を内観する〈私〉の活動舞台として，メキシコの海やテネシーなどとともにこのマナハッタが出てくる。

Me toward the Mexican sea, or in the Mannahatta or the Tennessee,
or far north or inland,
A river man, or a man of the woods, or of any farm-life of these
States or of the coast, or the lakes or Kanada, (5—6)

1823年，ウォルトが4歳のとき，一家はブルックリンに転住。1825年7月4日，滞米中のフランスの将軍 La Fayette がブルックリンを訪れ，起工中の無料図書館に立寄った際，たまたまこの将軍に抱き上げられていつくしみのキッスを受けたことは，ウォルトの大切な記憶となった。1825年から11歳になった1830年まで，ここの公立学校に通った。なお，ホイットマン家は，この間しばしば市内で移転をしている。

その後，1836年から1838年までと，1839年から1841年までの足掛け5年間，ロング・アイランドで教職についていたが，1841年の5月にニューヨークに行き，*New World* 紙の印刷の仕事をした。これ以来1862年12月，弟ジョージの安否を気づかってバージニアの前線に出掛けるまで，ニューヨークは彼の文筆活動の本拠であった。1848年のニューオーリアンズへの転地，転職にしても僅僅(きんきん)3か月余のことであった。この20余年間，彼は諸種の新聞，雑誌の編集者，主筆，フリーランスの寄稿家として，得意のローファーぶりを発揮している。「草の葉」初版の自費出版をするため，自ら活字拾いにとりかかったローム兄弟の印刷所もブルックリンにあった。

ホイットマンの詩を読むときにかならず感ずる，視覚力と聴覚力の自然にして美しいハーモニー。雨の音を大地の詩と聞いた自然児。2時間はくまん蜂と鳥の音楽に包まれ，風の嗄(しわが)れ声を気持のよい音色として聞き，足下にふまえた落葉のかさこそにじっと耳を傾けた彼の鋭敏な音のセンス。それが歌劇の中のアリアやデュエット，聖壇のオルガン，清純なコントラルトなどの鑑賞をとおして一層深められたのもマンハッタンである。

当時のブルックリンはまだ田舎(いなか)町だったが，ブロードウェイは人出で活気を呈し，ホイットマン家の近くには上げ潮や普断着の男と女の群衆が見られるフルトンの渡し場があった。Calamus 篇の「ブルックリンの渡船場をわたる」(Crossing Brooklyn Ferry) では，半時間後に沈む夕日 (sun there half an hour high)，水面に映る夏空 (the reflection of the summer sky in the water)，そしてほたて貝形の上げ潮の波 (scallop-edg'd waves of flood-tide) など彼の賛美した水景が，マンハッタンの高き檣(ほばしら) (tall masts of Mannahatta) や，鋳物工場の煙突 (foundry chimneys) の人間文明や，水先案内，人夫達，渡船場の木戸口を入る男女の人間そのものと混然一体化して，霊魂への彼等の役割を準備していることをうたっている。この詩には「マンハッタン」が4回でているが，3回の Manhattan のあと，最後に，前に引用した形，彼の気に入りの Mannahatta が，tall masts of Mannahatta！と感嘆符つきで登場している。また scallop-edg'd のごとく過去分詞を -ed の代わりに -'d であらわすのは pass'd, bluff'd のごとく彼の用語上の一特色と言える。expounded, related, lived, vouchsafed, bathed などは勿論そのままであるが……。

前の Paumanok が，「歓喜の歌」(A Song of Joy)，「ポウマノク」(Paumanok) や「モントーク岬から」(From Mantauk Point) などの詩として，Calamus 篇や Sands at Seventy 篇にのっているように，Mannahatta も Broadway を相棒として，同題の詩として，Sands at Seventy 篇に出ている。また「昼より星の輝く夜へ」(From Noon to Starry Night) 篇でも同じ Mannahatta という題の詩があるが，彼の印象の中では，岩石を土台とした，しかも流動的で音楽的な島であったようだ。

1873年1月23日，後には "a sixth recurrent of my war-paralysis"[20] となげかしめている中風の発作ではじめて倒れた。ついで同年5月20日，最愛の母ルイザ (Louisa) の危篤の知らせで，ニュージャージー州 Camden の弟ジョージの家にかけつけ，8日の後に母が世を去ると，そのままそこに寄寓することになった。"the great cloud of my life" に直面したウォルトはすでに54歳になんなんとしていたが，母の死体にすがって子供のように泣いた。野戦病院で感染したと診断されていた病毒は再び彼の肉体を損ね，もうワシントン[21]へ帰る気力もなかったのである。1884年3月，弟ジョージ大佐一家がカムデンを去ってバーリントンへ移住することになり，同地の Mickle Street 308 番地に家を求めた。稀代の自然人も65歳にしてついに住(すみか)処をもった。1750ドルをかけた二階建の，小さい家であった。この年，彼の新しい家を訪問した人々に，Edmund W. Gosse, Oscar O. W. Wilde, Robert G. Ingersoll らがいる。こうして1892年3月26日の彼自身の永遠の眠りまでの前後20年間，カムデンは文字通り第二の故郷となった。

「自選日記」によると，1876年の春 Timber Creek の Stafford 農場に厄介になり，日光浴や水浴をして思索にふけっている。この折の自然への共感は取り分けて強い。前述の脳出血の発作以来不随を来した左半身，とくに下肢の recuperation をはかっていたのである。頭をたれて草を噛む牝牛は一切の彫刻物にまさるものであった。柳の下のごぼごぼ鳴る泉の音を聞き，若木，老木の繁茂する絶景のなかで自然的薬療の効

果にすっかり満足していた彼！

(2) American Continent

1855年の Leaves of Grass 初版の序文では，アメリカ合衆国の風土をあらゆる時代，あらゆる国土を通じて最も充実した詩的性格をもつものと述べている。roughs, beards, space, そして ruggedness と nonchalance などの，霊魂に訴える魅力を列挙する彼は，"The United States themselves are essentially the greatest poem." と断じ，その壮大な国土の景物をつぎのように描写している。

> When the long Atlantic coast stretches longer and the Pacific coast stretches longer he easily stretches with them north or south. He spans between them also from east to west and reflects what is between them. On him rise solid growths that offset the growths of pine and cedar and hemlock and liveoak and locust and chestnut and cypress and hickory and limetree and cottonwood and tuliptree and cactus and wildvine and tamarind and persimmon...and tangles as tangled as any canebrake or swamp...and forests coated with transparent ice and icicles hanging from the boughs and crackling in the wind...and sides and peaks of mountains...and pasturage sweet and free as savannah or upland or prairie...with flights and songs and screams that answer those of the wildpigeon and highhold and orchard oriole and coot and surf-duck and redshoulderedhawk and fish-hawk and white-ibis and indian-hen and cat-owl and water-pheasant and qua-bird and pied-sheldrake and blackbird and mockingbird and buzzard and condor and night-heron and eagle.[22]

> (長い大西洋岸が延々と伸び，また太平洋岸が延々と伸びて行くところ，彼もまたその岸辺に沿うて北へ，南へと気楽に伸びて行く。彼はまた東と西の両岸を懸けつなぎ，その間にあるものを映し出す。彼の上方にはしっかりした成長の様がのぞまれ，それは松や，杉や，アメリカつが，かしわ，はりえんじゅ，栗，いとすぎ，ヒッコリー，しなのき，はこやなぎ，ゆりのき，さぼてん，野ぶどう，タマリンドや柿の木の示す成長を相殺(そうさい)するものだ……そして竹やぶや沼沢地がもつれあっているままのそのもつれの様を……透(す)き徹(とお)った氷におおわれ，その枝々からは風のなかでかりかり鳴る氷柱(つらら)を垂らした森林を……山腹を，山頂を……気持のいい牧草地を，広闊なサバナを，そして高地を，大草原(プレーリー)を映し出す……野ばと，きつつき，果樹園のこうらいうぐいす，おおばん，くろがも，赤肩のたか，みさご，白とき，インディアン・ヘン，猫鼠(キャット・アウル)，水きじ，クエイ鳥，まだらつくしがも，むくどり，ものまねどり，のすり，コンドル，ごいさぎ，そして鷲(わし)などの飛翔や，歌や，叫びに応(こた)え得るものを伴いながら。)

このホイットマンの自然賛美の眼は，故郷のロング・アイランドをスタートして，それ自体が偉大なる詩であり，新しい形態であった祖国アメリカ合衆国の自然の宝庫を発掘したあと，さらに国境を越えて前進する。

(3) World and Kosmos

ミシシッピの流れを，フロリダの芳香を，メーン州の松林，ヒューロン湖の水のひろがりを，また北カロライナ沿岸の瀬戸やヨセミテ渓谷の景観をうたう彼の耳には，絶えず波の音が流れていた。それは一切のものの基底にあってささやき，それらに滲(し)み渡る潮騒(しおさい)であり，世界の「両大洋」からの永遠の音であった。

> And murmuring under, pervading all, I'd bring the rustling sea-
> sound,
> That endlessly sounds from the two Great Seas of the world.
> (Thou Mother with Thy Equal Brood, § 2, 25—26)

こうして「カリフォルニアの岸辺から西に向って」[23] (Facing West from California's Shores) の詩を媒体として，彼の筆は「母性の館(やかた)」(the house of maternity) なる西の国士，さらにはヒンドゥスタンなどの世界の国々に向けられる。そして山を，海を，河を，そして砂漠を，その土着の住民たちに劣らぬ現実感と親近感をもって描き上げる。

「世界萬歳！」(Salut au Monde !) は13部，226行の長詩で，1856年の「草の葉」第2版では "Poem of Salutation" として，三番目に記載されていたものである。その第4部をひらくとつぎのようなパノラマが目を見張らせる。日本をめぐる海，長崎の美しい湾もこの世界詩人の脳裏に定着していたようだ。

I see plenteous waters,
I see mountain peaks, I see the sierras of Andes where they range,
I see plainly the Himalayas, Chian Shahs, Altays, Ghauts,
I see the giant pinnacles of Elbruz, Kazbek, Bazardjusi,
I see the Styrian Alps, and the Karnac Alps,
I see the Pyrenees, Balks, Carpathians, and to the north the
　　Dofrafields, and off at sea mount Hecla,
I see Vesuvius and Etna, the mountains of the Moon, and the
　　Red mountains of Madagascar,
I see the Lybian, Arabian, and Asiatic deserts,
I see huge dreadful Arctic and Antarctic icebergs,
I see the superior oceans and the inferior ones, the Atlantic and
　　Pacific, the sea of Mexico, the Brazilian sea, and the sea
　　of Peru,
The waters of Hindustan, the China sea, and the gulf of Guinea,
The Japan waters, the beautiful bay of Nagasaki land-lock'd in its
　　mountains,
The spread of the Baltic, Caspian, Bothnia, the British shores, and
　　the bay of Biscay,
The clear-sunn'd Mediterranean, and from one to another of its
　　islands,
The White sea, and the sea around Greenland.[24]

〈私は見る，たくさんの海洋を，
私は見る，山々の尖峰(せんぽう)を，私は見る，アンデス山脈の連なりを，
私ははっきりと見る，ヒマラヤ山脈を，天山(てんしゃん)山脈を，アルタイ山脈を，ゴートの連山を，
私は見る，エルブルス，カズベク，バサルデュシの天を摩する絶頂を，
私は見る，スティリアのアルプスを，またカルナックのアルプスを，
私は見る，ピレネー山脈，バルカン山脈，カルパチア山脈を，また北の方にドフラフィールド山脈を，沖合はるかにヘクラの山を，
私は見る，ベスビオとエトナの山を，月世界の山々を，マダガスカルのレッド山脈を，
私は見る，リビアの，アラビアのそしてアジアの砂漠を，
私は見る，北氷洋と南氷洋の巨大にしていかつい氷山を，
私は見る，大きな海洋と小さな海洋を，大西洋と太平洋を，メキシコの海，ブラジルの海，そしてペルーの海を，
印度の海洋を，支那海を，そしてギニア湾を，
日本の辺海を，山をめぐらし陸地に囲まれた長崎の美しい港湾を，
バルチック海，カスピ海，ボスニア海の眇(びょう)たるひろがりを，イギリスの海岸を，ビスケーの湾を，
明るい日射(さ)しをあびた地中海を，そしてそこに浮ぶ島々をつぎつぎと，
白海(ホワイト・スイー)を，そしてグリーンランドを取り巻く海を見る。〉

こうして，ローファーとして，自然人として成長していったホイットマンは，郷土を，祖国を，世界を，そして宇宙(コスモス)をうたうとともに，「私に似た地球よ」(Earth, My Likeness) に示されているように，大地のもつ激烈で，爆発的な性格をもった恐るべきもの (something fierce and terrible in me eligible to burst) である，名状しがたい詩人としての衝動を感じている。

Song of Myself の第33部などでもわかるように，彼の自然は孤立した自然，無常感をともなう自然ではなく，人間を勇気づけ，人間の営みに混在する自然である。われわれはここに，東洋人のとは違った活動性のあらわれ，また Derwent の流れささやくほとりで読書し，Lines Written above Tintern Abbey の絶唱をものした William Wordsworth の趣き[25]とも異質である，真にアメリカ的でダイナミックな自然観を見出す。それは自然界の調和と，人間界の幸福とを，ともどもに謳歌するものである。

この詩では，西部地方の大麻，ライ麦，鶉(うずら)，蝙蝠(こうもり)，黄金虫(こがね)，渓流，牧牛といったものが登場してくるが，

花綵のようにたれた蛛蜘の巣のつぎには，はねハンマーが響き，また印刷機のシリンダーが回転し，難破船への救命籃がたぐられたあとには，砂地の窪みで薄青い卵がかえる場面がつづくのである。貝類が甲板につきはじめると，下の船内では死体が腐爛している。また真夜中の沼地で黄色いとさかの青鷺が小蟹をあさる詩行につづいては，暑い午后に游泳者や潜水者が涼味を満喫するという工合で，自然の景物と俗界の一切を包含しながら，しかも動的である。日暮どき，黒ずむ陰影が広大にして静寂な大草原をおおう lonesome のおもむきの次の行では，バファローの大群の数平方哩におよぶ前進の光景が対応するなど，要するにアメリカ的運動の展開が各場面の生命となっている。

一つの宇宙 (Walt Whitman, a kosmos) と自称する彼の自然愛は，Song of Myself の 443—447 行にわたり，さらに明るく，さらに清らかに冴える銀鼠色の雲をたなびかす大地，引っつかむように肘を遠くへのばした，林檎の花ゆたかな大地への名状しがたい愛と賛嘆として語られている。

> Earth of the limpid gray of clouds brighter and clearer for my
> sake!
> Far-swooping elbow'd earth—rich apple-blossom'd earth!
> Smile, for your lover comes.
> Prodigal, you have givgn me love—therefore I to you give love!
> O unspeakable passionate love.[26]

かくて，彼の自然愛は宇宙の創造主への愛，宗教的愛に高まり，その愛の賛歌は詩法の旧套を脱して無限の太虚のなかを飛んで行く。再び静止することなしに……。

このような自然への passionate love は，「草の葉」の随処に顔を見せているが，ときには My Canary Bird! と呼びかけてその転りの joyousness を，また A Noiseless Patient Spider の忍耐，冥想，と冒険心を，そして冬の終りに咲き出た The First Dandelion の innocence と calmness などの美徳を学ぶ。「大道の歌」(Song of the Open Road) の第9部，116—119行では，一見粗野で不可解な〈自然〉，疲れを知らぬ大地，の汲めども尽きない divinity を表現している。

> The earth never tires,
> The earth is rude, silent, incomprehensible at first, Nature is rude
> and incomprehensible at first,
> Be not discouraged, keep on, there are divine things well envelop'd,
> I swear to you there are divine things more beautiful than words
> can tell.

この神聖な教示は，不断の精進と，われわれを取りまく hospitality に甘えない前進によって解明されるのである。

× × × × ×

「野ざらし紀行」に，「山路来て何やらゆかし菫草」の句があるのを知り，古風を脱却して清新な境地を開くために，日常性と具象性に力点をおいた芭蕉を思うとき，東西の両詩人の魂はこの上ない類似性を見せる。「高く心を悟りて俗に帰る」こともまた，ホイットマンの真骨頂にほかならない。

1860年の「草の葉」第3版で，No. 13 として書かれた「創造の法則」(Laws for Creation) では，世界の総和 (the ensemble of the world) や自由な歩みと共に，神聖な男と女が幽遠な法則を例証している。

> What do you suppose I would intimate to you in a hundred ways,
> but that man or woman is as good as God?
> And that there is no God any more divine than Yourself?
> And that that is what the oldest and newest myths finally mean?
> And that you or any one must approach creations through such
> laws? (8-11)

(男も女も神に等しいりっぱな存在だ。私が君に色々に暗示することはこれにつきている。
「君自身」より神聖な神などありようもない。
そして，それが最も古く，最も新しい神話の数々が最後に意味するものであり，
君にしろ誰にしろが，この法則によって創造に向かわねばならないということだ。)

ここに，ホイットマンの眼は内なる，自然人たる自己に向けられ，アメリカ人であると同時にコスモポリ

タンとして人間をたたえ，人間愛をうたう。

第 2 部　Amativeness

すでに述べたように，彼が自分で植字をして出した「草の葉」第一版にたいする世間の風は冷たかった。泥酔者の戯言として嘲笑され，僅かに12部が売れただけであった。この社会的な不評の大きな原因というと，詩人 A. C. Swinburne をして，「泥溝の中に転ぶ飲んだくれの婦人の如し。」と言わせた「草の葉」の詩形の奔放性とともに，彼の率直な人間愛の表白の問題があった。しかしこの表白こそは，アジアとヨーロッパの不朽の詩人たちが他界したあとに，世界の詩人として登場した彼が発表した先見であり，予言であった。

amativeness の問題は男女両性の問題であり，「草の葉」では「アダムの子ら」(Children of Adam) の詩群が中核的にこの部門にあてられている。しかし，これはあくまでも中核的ということであって，「ありふれた一娼婦に」(To a Common Prostitute) のような救済愛の詩が「秋の小川」(Autumn Rivulets) 篇の中にあり，美の年輪を賛えた「美しい女」(Beautiful Women)，母子の安らかな眠りをじっと眺めている「母とみどりご」(Mother and Babe) が「路傍にて」(By the Roadside) 篇の中に見られるように，女性を対象とした詩は全詩篇にわたっている。事実，彼は「草の葉」をもって「本質的には女性の本である」としている。

彼の当代の男女の観察はつぎのようである。

> We live in an atmosphere of hypocrisy throughout. The men believe not in the women, nor the women in the men. A scornful superciliousness rules in literature.[27]
>
> (Democratic Vistas)

かかる男女間の不信，瀰漫する偽善の雰囲気，嘲笑的で尊大ぶった文学，あるいは随処に見られる変態的な好色や不健全な姿態 (an abnormal libidinousness, unhealthy forms), せっかくの良い母親となりうる資質が減退しつつあったり，減退し果てている姿……。これらの背景からして，彼が「アダムの子ら」を世に問おうとした意欲の必然性を感知できると思う。社会再建の唯一の道として完全なる母性 (a perfect motherhood) を供しうる女性の新しき誕生と，その向上，発展，活気づけこそ，女性の偉大なる領域 (sphere) を自覚したホイットマンの信念に外ならない。彼が実在せる人間のうちで最大の愛情を抱いていたのは，'a perfect mother,' 'Dearest Mother' として終生尊敬していた母ルイザであった。[28] 彼の深い人間愛，宗教的な敬虔の念，海への深い愛着は，このオランダ人とウェールズ人の混った母系，Van Velsor 家によるもののようである。

(1) Children of Adam

Specimen Days の「ボストン共同所有地—さらにエマソン」(Boston Common—More of Emerson) には21年前の明るい，身を切るように寒い二月の一日，共同所有地の古い楡の木の間を行きつ戻りつして，「草の葉」の深き理解者エマソン[29]と "Children of Adam" の詩群について語り合ったことが回想されている。男盛りで，道徳的牽引力もある，"an army corps in order, artillery, cavalry, infantry," のようなエマソンの検閲，攻撃と論告は，かえってホイットマンに逆説的教訓をあたえただけだった。彼のはっきりした返答はつぎのようであった。

> "Only that while I can't answer them at all, I feel more settled than ever to adhere to my own theory, and exemplify it." [30]
>
> (私にとっては，それらのことにお答えすることなどとてもできませんが，自分の持論を守って，それを例示しようという気持はいつになく固まってきたようです。)

エマソンの慎ましい教養から生まれた湖水のごとき清い美しさと，ホイットマンの荒々しい原始の直覚から生まれた激流のごとき壮んな美しさのコントラストは正しく一幅の絵である。

英人 J. A. Symonds の執拗な質問にたいして彼が答えた手紙のなかで，*Crescent* 紙の仕事に関係して New Orleans に赴いていた所謂「南部時代」における "six illegitimate children" という語句がある。正式の結婚はしていなくても，自分には子供が6人いる（そのうち2人は死亡）という内容である。この素材

から英人 H. B. Burns もその著 *Life of Walt Whitman* (1905) で疑義をただしている。また Henry Seidel Canby は，その著 *Walt Whitman, an American* (Boston, 1943) のなかで，ホイットマンの生涯の独身生活を性的理由によるものとして，「草の葉」における女性に関する表現の，プラトニックで空想的な性格がある等の問題点を上げているが，要するにどの点に関しても確証的なものはない。またホイットマンが折々に示している屈託なさ，ユーモアのセンスを考え合わせると，未だに群盲象を手さぐるの感がない訳ではない。J. E. Miller, Jr. はホイットマンのラブ・ロマンスはアメリカが相手であった (Whitman's Creole romance was with American herself.)[31]と言っている。

詩人が1884年3月，カムデンのミックル街328番地に居宅を構えて以来，父親の愛をもって親しんだ若者に Horace L. Traubel がいる。このトローベルが目の当りにしたのは，男にも女にも平等にされた愛の表現の見られる，自制的なホイットマンであり，理想の女性であった母ルイザの影響を受けてクェーカー的傾向の強い自然人，独身の平民詩人ホイットマンであった。恋人さえも目に見えない鎖と感じ，一個人への愛よりも自由を大切にした彼の面目は，1876年に海を渡って来たイギリスの女性，Anne Gilchrist 夫人の愛を拒んだことからも忖度(そんたく)できよう。決して恵まれたとは言えない物質生活の中でむしろ簡素と自由を喜んだ人，幸福感と自信に溢れた生涯を送った光明の独立人，それがホイットマンであった。

Christian Examiner 誌により "impious libidousness" と呼ばれ，J. G. Whittier によって火中に投ぜられた「草の葉」は，男女の肉体の諸特徴を記述し，賛美した詩の末尾を次の5行でしめくくっている。

The beauty of the waist, and thence of the hips, and thence downward toward the knees,
The thin red jellies within you or within me, the bones and the marrow in the bones,
The exquisite realizaion of health;
O I say these are not parts and poems of the body only, but of the soul,
O I say now these are the soul! (I Sing the Body Electric, § 9, 160—164)

ここに姿を見せる肉体は，男性にしろ女性にしろ日焼けした健康な the body clectric であり，a clean, strong, firm-fibred body である。5人の息子をもった父なる百姓であり，また母性を顕現した女性である。こうして赤き果漿(ジェリー)も，骨の中にある髄も単なる肉体の一部や肉体をうたう詩にとどまらず，霊魂そのものにまで昇華する。

Who includes diversity and is Nature,
Who is the amplitude of the earth, and the coarseness and sexuality of the earth, and the great charity of the earth, and the equilibrium also, (Autumn Rivulets, Kosmos 1—2)

彼の宇宙 (Kosmos) は大地の広大性，粗野性，慈善や均衡の性格とともに男女の性を体現するものであった。

I believe the soggy clods shall become lovers and lamps,
And a compend of compends is the meat of a man or woman,
(Song of Myself, § 30, 658—659)

（しめった土塊(つちくれ)も愛人となり，光明となり，
とどのつまりは男または女の肉に落着くのだ。）

大空の二羽の鷹，海中に遊ぶ二尾の魚，あるいは "A Woman Waits for Me" といった hetrosexual なものにかぎらず，性のイメージは「草の葉」に登場する自然の内竜骨(ケルソン)になっている。女性として，ときに男性として見たてられた夜，自然のすべてに行きわたる〈性〉，海にも陸にもみなぎる〈性〉のイメージ……。[32]〈性〉は一切の誕生を意味し，一切を表現するものである。"Religion" についての講演用に彼が準備したノートによると，〈宇宙の霊魂〉は〈男性〉であり，〈肉体〉を形成する物質は〈女性〉であり，〈母〉なのである。(The Soul of the Universe is the Male—Physical matter is Female and Mother.)

A Woman Waits for Me では，植えつけられた愛は不滅の愛の収穫を期待し，(I shall look for loving crops from the birth, life, death, immortality, I plant so lovingly now.), sex はすべての政体，法官，そして神と地上に存在する人々 (All the governments, judges, gods, follow'd person of the earth,) を包含する。

前にふれた I Sing the Body Electric (Children of Adam) では，完全，神聖にして肉体それ自身が説明を拒否する (the body itself balks account) ところの両性の anatomical inventoy が，父性として，母性として次のように列挙されている。

強い肩，男性的な顎鬚，肩胛骨，後ろ肩，胸の肉づきのよい両腋，上膊，腋の下，肘窩，下膊，腕の腱，腕の骨組……といった manhood と paternity,

Strong shoulders, manly beard, scapula, hind-shoulders, and the ample side-round of the chest,
Upper-arm, armpit, elbow-socket, lower-arm, arm-sinews, arm-bones,
Wrist and wrist-joints, hand, palm, knuckles, thumb, forefinger, finger-joints, finger-nails,
Broad breast-front, curling hair of the breast, breast-bone, breast-side,
Ribs, belly, backbone, joints of the backbone,
Hips, hip-sockets, hip-strength, inward and outward round, man-balls, man-root,[33]

子宮，乳首，母乳，涙，笑い，泣き噦り，愛の視線……皮膚，日焼けの色合，雀斑，毛髪といった womanhood と maternity,

The womb, the teats, nipples, breast-milk, tears, laughter, weeping, love-looks, love-perturbations and risings,
The voice, articulation, language, whispering, shouting aloud,
Food, drink, pulse, digestion, sweat, sleep, walking, swimming,
Poise on the hips, leaping, reclining, embracing, arm-curving and tightening,
The continual changes of the flex of the mouth, and around the eyes,
The skin, the sunburnt shade, freckles, hair,[34]

Children of Adam は1860年に "Enfans d' Adam" のタイトルではじめてＬＧに登戴され，1871年に Drum-Taps の中の詩二つを移して16の詩群として世に問われたものである。霊肉一致の妙諦が説かれており，全篇ほとんどが愛と性の頌歌と言える。この詩群の最初と最後の詩の主題が Adam であることは注目してよい。

詩人がトローベルに語ったところによると，「アダムの子ら」は最悪と最善の両者を伝えるものであり，彼としてどうしても後退できない信条，すなわち人生経験によっても確認された情緒である。この詩篇をＬＧから撤去することは彼の "the whole scheme" を瓦解の危険にさらすことを意味するものであった。

以下これらの16の詩群を順をおって略述してみる。

楽園への行進にイブが私と並び，また背後から跟いて来る To the Garden the World。

立派な子供だちの必要なことをうたい，生殖の歌をうたい，男性的な衝動と和合をうたう From Pent-up Aching Rivers。大空の二羽の鷹，海に泳ぐ二尾の魚に劣らぬ放縦さ，自然さをもつ男女の結合，そして the drive of sex のオリジナルな賞揚がみられる。

ついで前述せる I Sing the Body Electric と A Woman Waits for Me の二つの詩，

天真爛漫なる我，すなわち Nature, そして love thoughts, love-juice, love-odor, 愛への応え，愛への登攀とそのエネルギー，清浄なる大地の愛，真の生命を付与する愛をうたう Spontaneous Me。

自分に示された愛が heavens へ上昇，躍進する様を，そして inebriate soul をうたう One Hour to Madness and Joy。

平安なる海原へと戻って行く愛と死をうたった Out of the Rolling Ocean the Crowd。[35]

Sex のうちにその歌を浴みさせ，アダム風の歌の歌い手である自分を披瀝する Ages and Ages Returning at Intervals。

転び合い，濡れそぼつ快活な波や，透明で感受性の強い大気のような「われわれ二人」をうたう We Two, How Long We Were Fool'd。この二人は永い欺瞞から Nature として脱却することをこころみている。

George Sand の小説，"The Countess of Rudolst" に暗示を得たと言われている，愛の男神と女神に捧

げられた4行の短詩，O Hymen ! O Hymenee !。

自分が逢い，あるいは知った一切の対象に感ずる地球の牽引力を，そして amorous love の苦しみをうたった三行の短詩，I Am He That Aches with Love。愛することの苦しみとそれに伴う満足感と偉大性をたたえている詩は外にも多い。

It is a painful thing to love a man or woman to excess, and yet it
satisfies, it is great, (Inscriptions, Starting from Paumanok, § 9, 126)

だがこれも偉大なる宗教的愛への一階梯である。

「自然」の寵児たちと連れ立って行き，彼等の詩人となる libidinous joys だけを求める Native Moments。バージニア大学の C. W. Barrett のコレクションにある M. S. には，削除された "Give me fierce pleasures only ! Give me the weedy luxuriance !" などの詩行が見られる。

ニューオーリンズの "romance" をホイットマンの伝記作者だちに推論させている蜃気楼のような Once I Pass'd through a Populous City。M. S. にはつぎのような，削除された，一男性への記憶の詩行が見られる。

But now of all that city I remember only the man
who wandered with me, there, for love of me,

教会より流れる厳かにも美しいオルガンの調べに，秋風の哀しきささやきに，またイタリア人テナーの歌うオペラに，よみがえる愛の思い出をうたった I Heard You Solemn-Sweet Pipes of the Organ。

ローファーとして，民族のシンボルたる放浪詩人の役割りをうたう Facing West from California's Shores。Hindustan の，Kashmere の東洋を経て，地球を西に一巡し，神，聖賢，英雄の住む北方より，また花咲く半島の南方よりの旅を終ってふたたび故郷に目見えるホイットマン！

Children of Adam において最初の詩 To the Garden the World に対応し，Eden への郷愁のなかで逞しい肉体と男性愛の Adam を示して全篇を結ぶ As Adam Early in the Morning。この詩はつぎのような5行詩である。

As Adam early in the morning,
Walking forth from the bower refresh'd with sleep,
Behold me where I pass, hear my voice, approach,
Touch me, touch the palm of your hand to my body as I pass,
Be not afraid of my body.[36]
(早朝のアダムのように，
眠りより覚めて元気よく四阿から出てきた
私が通るのを御覧，私の声を，近づく足音をお聞き，
通り過ぎる私に触りなさい，あなたの手のひらで私の体に触りなさい，
私の体を恐れることはありません。)

「草の葉」において，「カラマス」の篇では一連の39の詩群中，For You O Democracy, The Base of All Metaphysics, To a Stranger と To a Western Boy の4詩が，そしてこの「アダムの子ら」の篇では16の詩ことごとくが，その第一行をタイトルをそのまま受けてスタートさせている。この例は，外の詩篇においてもかなりの数にのぼる。おもしろい特徴だと思う。これは意図的であるとなしとを問わず，これら一群の詩を visualize し，一貫した流動性，発展性をもたらす技法として大いに貢献していると思われる。

(2) その他の詩篇

Adam の詩篇のほかにも既述のように，LG 全篇にわたり建全な amativeness は称揚される。光まばゆいスバルの姉妹たち (the radiant sisters the Pleiades) よりも永続する何ものかを志していたホイットマン！ その彼が「草の葉」の作詩の意図としていたのは，Starting from Paumanok, § 6, 71—73 の詩行が示しているものである。

I will make the poems of materials, for I think they are to be the
most spiritual poems,

And I will make the poems of my body and mortality,
For I think I shall then supply myself with the poems of my soul
and of immortality.[37]

霊的な詩とせんがために物質をうたい，霊魂と不滅なものの詩をつくるために肉体と滅びるものをうたうのである。

Song of Myself においては，美女と同様に醜女も気に入り，花嫁と合巹し，"I tighten her all night to my thighs and lips." (§ 33, 819) とうたい，夫の溺死体のかたわらで悲しむ妻の叫びを発する。懐胎に適した女達には，さらに肥ってさらに元気な嬰児をつくり出させる。それは同時に，"This day I am jetting the stuff of far more arrogant republics." (§ 40, 1007) ということである。

"Grass" のイメージは地上に定着し，偉大なる天体圏を拡大しながらも地上的な趣きはいささかも失われないで，むしろより清新味を加えている。〈愛と剣〉をこの世にもたらしたキリストのごとき宗教詩人。だが米人イルバート・ハッバートが述べたように，ミルトンは天国を，ダンテは地獄を，そしてホイットマンは地上を語ったのである。玄妙な宇宙は死だけの世界ではなく，生，喜悦，愛，物象，知識といった地上的な性格をもつものによって織りなされるわけである。

憐憫を基調とした異次元の愛の詩としては，Autumn Rivulets 篇の To a Common Prostitute がある。この詩はいくたびかの censorship と削除の慫慂[38]にも堪えて，1860年の "Messenger of Leaves" 以降の各版において修正なしに残された詩である。ホイットマンは，St. John の第8章において姦淫の罪を冒した一女性にむかって Jesus の言ったことば，"Neither do I condemn thee : go, and sin no more." の variation と考えていたようである。芭蕉の句を借りれば，美景に美女を連想する「象潟や雨に西施がねぶの花」から，親不知で詠んだ「一家に遊女もねたり萩と月」への移行と言えよう。「辛抱強くして，立派な人になっているように。」というのがホイットマンの願いである。また同篇の The City's Dead-House では，一人の売笑婦の死体，都会の仮死体収容所によこたわる惨めな破局への彼の同情の息衝きが聞かれる。愛はしばしば死と裏腹に存在している。

戸外における，上品で気力の充実した愛をたたえたホイットマンには，By Blue Ontario's Shore の第13部におけるごとく，低俗で無気力な男女の愛の modes に顰蹙する場面がでてくる。顔や物腰に "gentility" の外観をとどめようとして，胃病やみのように人形じみている西部の平原都市の女性にたいして彼は呼びかける，「東部の姉妹たちへの追随をやめて，心に体に本原性をもちなさい。」と。

さて目を鳥の世界に転じてみよう。Specimen Days を読むと，Days at J. B.'s—Turf-Fires—Spring Songs におけるごとく，"Don't you see ?" "Can't you understand ?" のように野ひばりを聞き，快活で流れるような駒鳥の人間じみた調べを聞き分けようとしている。Hudson River Sights の章では，ゆっくりと翼を動かす一羽の飛翔中の大鷲に，lord of power and savage joy の姿を見出す詩人の態度がうかがわれる。その他，多数の鳥が北に渡るざわめきを，稀有の音楽と聞く Birds Migrating at Midnight, 幾万羽という数で空をすっかり暗くする Crows and Crows など，鳥の世界の住人たちと一体感を喜んでいる章はかなり多い。

Leaves of Grass に「奥の細道」の首途の句，「行く春や鳥啼き魚の目は泪」の境地を求めるなら，アラバマから渡ってきた相愛の一番の小鳥にまつわる悲劇をうたった詩がある。これは1859年の作で，Sea-Drift 篇におさめられている Out of the Cradle Endlessly Rocking で，アメリカの lyrics のうちで最大傑作の一つといわれている。意識と無意識の混在する恍惚感のなかでとらえられた愛と詩の悲劇である。

また鳥の間の Eros をえがいた詩としては，1880年作で By the Roadside 篇の The Dalliance of the Eagles[39] がある。空高く，彼女は彼を，彼は彼女を追いもとめる鷲のたわむれ，互に急進する amorous contact の賛歌である。

(3) 完全なる母性

以上の amativeness の詩群を通読すると，結局はそのすべてが一元的で偉大な母性へと昇格してゆくことがよく理解できる。すでにふれた Mother and Babe (By the Roadside), 南北戦争で戦死した最愛の息子をもとめて，真夜中に泣きくずれる母親の姿を迫真にえがく Come Up from the Fields Father (Drum-Taps)。永遠に地上の偉大なる存在である男性，だがその偉大性のいかなる小部分も女性から生まれ出たも

のであることをうたう Unfolded Out of the Folds (Autumn Rivulets)……。

1873年作で同じ Autumn Rivulets 篇にある「あなたのすべての天恵を持って」(With All Thy Gifts) は，アメリカにおける完全な女性達，母親達の偉大なる役割をたたえる次の7行からなる詩である。

With all thy gifts America,
Standing secure, rapidly tending, overlooking the world,
Power, wealth, extent, vouchsafed to thee—with these and like
of these vouchsafed to thee,
What if one gift thou lackest? (the ultimate human problem never
solving,)
The gift of perfect women fit for thee—what if that gift of gifts
thou lackest ?
The towering feminine of thee ? the beauty, health, completion,
fit for thee ?
The mothers fit for thee ?[40]

（アメリカはあなたのすべての天恵を持って，
しっかりと立ち，てきぱきと気をくばり，世界を見おろしている，
力，富，広がりがあなたに与えられる——これらとそしてこれらに似たものがあなたに与えられる，
そのうち一つの贈り物でもあなたに欠けることがあったら？（究極的な人間関係の問題が一向に解決をみないままで，）
あなたにふさわしい完全な女性たち，贈り物の中の贈り物である彼女たちが欠けたら，あなたはどうなる？
高くそびえるあなたの女性像が，あなたふさわしい彼女たちの美しさが，健康が，完成の趣が欠けることになったら？
あなたにふさわしい母親たちが欠けることになったら？）

亡き母ルイザを哀悼した詩に「あなたの門口にも死が」(As at Thy Portals Also Death) がある。1881年作で「別離の歌」(Songs of Parting) 篇におさめられたこの詩は，神のごとき一元性をそなえていた彼の母への慕情に浸(ひた)されている。

As at thy portals also death,
Entering thy sovereign, dim, illimitable grounds,
To memories of my mother, to the divine blending, maternity,
To her, buried and gone, yet buried not, gone not from me,
(I see again the calm benignant face fresh and beautiful still,
I sit by the form in the coffin,
I kiss and kiss convulsively again the sweet old lips, the cheeks,
the closed eyes in the coffin;)
To her, the ideal woman, practical, spiritual, of all of earth, life,
love, to me the best,
I grave a monumental line, before I go, amid these songs,
And set a tombstone here.[41]

（あなたの門口にも死が訪れ，
霊妙にして幽暗，しかも広大な領域のなかへと入り込むとき，
私の母，神々しく一切を融合する母性，の思い出にたいして，
埋められて，黄泉路(よみじ)へ去ったとはいえ，私にとっては埋められもせず，亡き数にも入らぬ彼女にたいして，
（私はもう一度，おだやかで慈愛にみちた彼女の顔を，まだ生き生きとして美しいその顔を眺める，
私は棺(ひつぎ)のうちなるその亡骸(なきがら)の側(かたわら)に坐り，
そのやさしい，見慣れた唇に，頬に，閉ざされた目に，棺のうちなるそれらに接吻する，

狂ほしくまたも，）
経験も豊かな，気高き理想の女性，地上の生きとし生けるもの，愛すべきもののうちでも
私にとって最高の存在である彼女にたいして，
私は，私が去り行く前に，彼女を記念する一行を刻みつける，これらの詩の中ほどに，
そしてここに彼女のための墓碑を立てるのだ。）

Specimen Days や，Henry M. Christman の編集した *Walt Whitman's New York* など，ホイットマンの散文集はどれも「草の葉」の各作品に不即不離の対応をしめしている。同時に文体それ自体も Transcendentalist の文人 H. D. ソローに匹敵する平明暢達，雄渾絶妙の趣きをもつものと思う。ここでは，Democratic Vistas の中から，道義心の要素とともにアメカの社会全体に欠けている婦人の至高の特性，健康にして強壮なる母性，の必要を訴えている部分を引用してみる。

I have sometimes thought, indeed, that the sole avenue and means of a reconstructed sociology depended, primarily, on a new birth, elevation, expansion, invigoration of woman, affording, for races to come, (as the conditions that antedate birth are indispensable,) a perfect motherhood. Great, great, indeed, far greater than they know, is the sphere of women. But doubtless the question of such new sociology all goes together, includes many varied and complex influences and premises, and the man ss well as the woman, and the woman as well as the man.[42]

（私は時折考えるのだ。本当のところ社会再建の唯一の進路，方策は，第一に，来るべき種族を産み出すような（出生前の必須の条件として）完全な母性を供する女性の新しい誕生と昇格，発展と勇気づけにあるということを。婦人たちの占める役割は，彼等が自覚しているよりもるかに偉大である。全く偉大の一語につきる。だが疑もなく，このような新しい社会学の問題は，多様で複雑な影響力と前提条件を含んで進むものだ。女性と同様に男性を，また男性と同様に女性を考えながら。）

こうして男女は必然的に平等である。(And I will show of male and female that either is but the equal of the other,... Starting from Paumanok, §12, 165) 偉大なる和らぎの光源である母とそのめぐし子への愛は，国家とその構成員との間の連帯感にエリベートされ，the Mother of All=America=Libertad of the world の段階を前進する。こうしてコスモポリタンな「僚友愛」の sphere が展開する。

第 3 部　Adhesiveness

「友よ，君の膝を枕に横になって」(As I Lay with My Head in Your Lap Camerado) は，最初 "Sequel to Drum-Taps, 1865-1866" の中におさめられ，ついで "Indeed I am myself the real soldier..." といった戦争色をもつ詩行の削除により，より普遍性をもつものに改善されて，1881 年に "Drum-Taps" 篇に編入された詩である。この詩では僚友愛における逞しい意志の必要がつぎのように強調されている。

Dear camerado! I confess I have urged you onward with me, and
still urge you, without the least idea what is our destination,
Or whether we shall be victorious, or utterly quell'd and defeated.

（親しい友よ！　僕は君に僕との前進をうながしたことを，そして今もうながしている
ことを打ち明ける。それも，僕達の行く先がどこにおちつくのか，
勝利に輝くものか，それともすっかり制圧されて敗北に終るものか少しもわからない
ままで。）

ここには国家分裂の危機に際し，しかも人道主義の理想をかかげて十字架刑の日々をおくった者のみが知る不屈の忍耐心がみられる。

ホイットマンの amativeness は John Keats の詩作[43]に見られるような，アポロの球体や，宵の明星ヘスパラスと競い合うギリシア的美しさをもつものではなく，より健康的，より原型的なアダムとイブの愛であったことは既述のとおりである。そして彼の adhesiveness—comradeship もまた大地に定着した，ごく素朴な民衆の結合から開花する。彼に許容される人間はまことに多岐にわたる……憤怒の形相の暴徒，怒罵し格闘し合う仇敵，呻吟する過食者，逮捕された無頼漢，逃亡せる奴隷，口をぽかんとあけた阿片喫煙者，吹出物だらけの首をした娼婦，病重き精神病者，監視人の目の下で除草する黒人の群……あらゆるタイプの人

間が凝視される。老人も青年も，賢者も愚者も含めて……。あらゆる身分と宗教が彼自身である。この僚友愛は果てしない青海原の波間より生れ出づるものであり，目路遙かなアメリカの大草原に成長するものであった。また彼がうたい出す大自然においては，美と醜の二元的対立はあまり強調されず，aggregate として扱われているように，精神界での追究においても，イデアの世界への憧憬とともに，恋愛，僚友愛，同胞愛，愛国心などの「精神的な美しさ」がはっきりと意識されている。「美しき魂」(Schöne Seele) の把握に向かう美意識である。

(1) Calamus

「かちとった名声を思うとき」(When I Peruse the Conquer'd Fame)[44] (1860-1871) においては，渝ることのない友愛がたたえられる。

> But when I hear of the brotherhood of lovers, how it with them,
> How together through life, through dangers, odium, unchanging, long and long,
> Through youth and through middle and old age, how unfaltering, how affectionate and faithful they were,
> Then I am pensive—I hastily walk away fill'd with the bitterest envy.[45]

> (しかし，愛し合っている仲間の友達付合いがどんなものなのか，
> 一生を通じて，危険や逆境にあっても長く長く渝らないで，
> 青年，中年，老年のどの時期においても水も差されずに，愛情にみちた忠実なお互いのままであることを聞くとき，
> 私は思いに沈み……はげしい羨望の念に胸ふさがれて急ぎ足に立ち去って行く。)

名声や，戦歴，栄職，財産といった一切が，清純な brotherhood の前ではすっかり影を潜めてしまう。「草の葉」における comradeship についての詩群を考えるとき，「カラマス」(Calamus) 篇にその凝縮された姿を見るのである。「アダムの子ら」を "the purity, holiness and perfect sanity of the sexual relation" と言った Dr. Bucke は，またこのカラマス篇についても "an exalted friendship, a love into which sex does not enter as an element" であるとし，どちらの詩篇においても異常性をもつ汚点など全くないと言明している。ただ「アダムの子ら」の〈性〉の賞賛にたいして，「カラマス」の方は，B. D. Selincourt の指摘しているように，[46] 魂と魂の理想的関係としての〈愛〉の賞賛が見られる。ここで描かれる愛は，〈性〉とは無関係な立場をとっての男性対男性，女性対女性，ときに男性対女性の間に見られる愛であり，生活の過半を占める包括的性格のものである。

「自選日記」におさめられた散文のコレクションにたいして，ホイットマンが本としてのあるいはその部分としての表題の候補中に列挙しているものを見ると，As August mulleins grow, Only Mulleins and Bumble-Bees などのタイトルが，彼のもうずいか (mullein) への並々ならぬ愛着を裏書きしている。これと同様の，あるいはそれ以上の位置にあるのが LG における Calamus 篇であろう。カラマスは米国の北部，中部の諸州の全域にわたって，谷間の池のあたりに生育する3フィートほどの高さの芳香ある草である。Democratic Vistas と，1876年の Preface to LG によれば，彼は当時のアメリカの物質偏重主義と低俗性にあきたらず，デモクラシーにおける僚友愛の発展的存在を示すシンボルとしてこのカラマスという草を用いたのである。草は緑色の希望の旗である。それは，彼が愛した，有能で機敏な，アメリカ的男性たちの間に生まれる adhesiveness を強調したシンボルである。

カラマス篇には，シリーズものの39の詩と，独立せる12の詩，計41の詩が含まれているが，「アダムの子ら」にならってその組成を通覧してみたい。

新しい規範としての強健な僚友の愛，manly attachment をとく In Paths Untrodden。[47]

多年生の根とほっそりした葉をもった，我が胸のかぐわしき草が登場し，愛と死の抱合を説き，私と仲間のことを力をこめてうたおうと説く Scented Herbage of My Breast。

表面的な尊敬や愛ではない「草の葉」の真意を，求道の久しい苦しみを，高い丘の上での抱擁をうたう Whoever You Are Holding Me Now in Hand。

僚友間の生涯の愛，男性的愛，高遠な愛によって金剛不壊の大陸，離れがたい国土となったアメリカに捧

げる詩，For You O Democracy。

僚友の記念(かたみ)のカラマスの根，それを私と同じように愛し合える者だけにあたえる These I Singing in Spring。"These" は，詩人が僚友のために集めた "tokens" であり，特にはカラマスの根である。

発せられた言葉，そしてこだまする言葉，……肉体や官能にではなくて，友人との adhesiveness の中に生命の脈搏を感ずる Not Hearing from My Ribb'd Breast Only。

現象についての，また墓のむこうで保たれる同一性 (identity beyond the grave) についてのきびしい懐疑も，僚友と手を握り合って坐る英知の雰囲気のなかで安らいでゆくことをうたう Of the Terrible Doubt of Appearances。

カント，フィヒテ，シェリング，ヘーゲル，プラトン，ソクラテスそしてキリストなど，あらゆる形而上学の根底を，友人同志の，都市と都市の，さらに国家と国家の間の "love" と "attraction" に見出す The Base of All Metaphysics。

詩や歌ではなく，愛の海原を誇るホイットマンの自画像……森の中，丘の上で親友と逍遙する楽しさを説く Recorders Ages Hence。

静けさのなかで，秋の月光に照されつつ親しい友と過す一夜の幸福に浸る When I Heard at the Close of the Day。

月並みで上面(うわつら)の友情を警戒する Are You the Person Drawn toward Me ?

> Do you suppose you will find in me your ideal ?
> Do you think it so easy to have me become your lover ?
> Do you think the friendship of me would be unalloy'd satisfaction ?
> Do you think I am trusty and faithful ?
> Do you see no further than this facade, this smooth and tolerant
> manner of me ?
> Do you suppose yourself advancing on real ground toward a real
> heroic man ?[48]

（君は私を理想的な男だと思うのかい？
君は私を君の親友とすることがそんなに簡単だと考えるのかい？
君は私との友情がまじりのない満足をもたらすものと考えるのかい？
君は私が信頼のおける忠実な男だと考えるのかい？
君は私の表側，さわりの良い寛容な態度だけ見れば，その先はどうでもいいの？
君はしっかりした足場に立って，ほんとうに英雄的な男に向っているのだと思うのかい？）

こうして真の友情形成に必要な五つの問が発せられ，それぞれしっかりと解答されねばならないのである。

太陽の熱と，滋養物と湿度から，花と咲き，大樹と育つ友情の芽生えをうたう Roots and Leaves Themselves Alone,

愛と友情のために燃えさかり，燃え尽きる私の魂を送る Not Heat Flames Up and Consumes。

私が書く歌の各頁を，血の雫(しずく)が赤く染める Trickle Drops,

夜会や饗宴ではなく，自分の愛にこたえうる友の愛を期待する City of Orgies,

一人のマンハッタン男と私とが，陸に海に僚友の挨拶を交(かわ)し合う Behold This Swarthy Face,

ルイジアナの渺茫(びようぼう)たる平地に男性的愛を思わせつつ，一本の柏(かしわ)の木が孤独に輝いている I Saw in Louisiana a Live-Oak Growing。彼にとっては友人のいない孤独の生活など堪えられるものではない。

> But I wonder'd how it could utter joyous leaves standing alone
> there without its friend near, for I knew I could not,

見知らぬ人々への共感を広く吐露する To a Stranger。友人との再会を確信し，彼を見失わないようにとの配慮も払われる。

特有の dialects をもつ支那，ロシア，日本など，世界の人類に，国境を越えた愛情と連帯感を寄せる This Moment Yearning and Thoughtful。

僚友愛の制度 (the institution of the dear love of comrades) によって既存の制度を改廃する I Hear It Was Charged Against Me。

大草原の草を分けて進む The Prairie-Grass Dividing は，このシリーズのほぼ中心にあって草の葉のイメージを表出している。Song of Myself, 第6部の "What is the grass ?" や既出の Scented Herbage of My Breast などと共に。アメリカの中央に延々としてひろがるプレーリーに，たくましく生れ出た素朴で情熱的な草の姿，それは彼の愛したアメリカの民衆の表徴であった。

Demand the blades to rise of words, acts, beings,
Those of the open atmosphere, coarse, sunlit, fresh, nutritious,
Those that go their own gait, erect, stepping with freedom and
　　command, leading not following,
Those with a never-quell'd audacity, those with sweet and lusty
　　flesh clear of taint,[49]

（もろもろの草の葉に言葉と行動と存在の生起を要請する，
ひろびろとした大気のもつ，粗野にして，陽光に照らされ，新鮮にして滋味のあるものについて，
自分なりの歩調で，上体を真直ぐにしてのびのびと前進し，服従することなく命令し，先導するものについて，
決して押し鎮(しず)められない大胆さを伴い，新鮮にして強壮な，汚点のない肉体を伴うものについて，）

彼等は，大統領や知事たちの顔をも "Who are you ?" と問うようにのぞき見る，単純にして強制されることを知らぬ庶民たちである。

このシリーズものの後半に入ると，前に引用した When I Peruse the Conquer'd Fame が出てくる。Calamus 篇は，Old Age Echoes をふくめた LG 15篇中最も多い頁数を占めており，ついで Song of Myself の入った Inscriptions が二番目，Autumn Rivulets が三番目になっている。このことからして，僚友愛を謳歌したこの詩篇が「草の葉」のなかで占める中心的位置と，その大きな役割りが推察できると言うものである。この詩集のバックボーンである democratic love にしても，「アダムの子ら」に比しして遙かに高度な精神性を培いながら，この「カラマス」を中心に絢爛(けんらん)と咲き競っている思いがする。

When I Peruse the Conquer'd Fame につづいては，二人の若者が相擁する We Two Boys Together Clinging。

逞しいアメリカ風の愛情の何たるかを教える約束をする A Promise to California。アメリカの全土にわたる友愛により成就される結合は，建国の主意であり前代未聞の歓喜である。

ついで三行の詩で，カラマス篇中一番行数が少い，[50] Here the Frailest Leaves of Me。

Here the frailest leaves of me and yet my stronget lasting,
Here I shade and hide my thoughts, I myself do not expose them,
And yet they expose me more than all my other poems.[51]

（ここに最もかよわくして，しかも最も力強く存続する私の詩篇の数々がある，
ここに私は私の想念を隈(くま)どり，秘めておく，そして私自らは彼等の実体をあらわに示すことはしないが，
彼等が自ら，私の他の一切の詩にもまして，私の実体を明らかにしてくれる。）

この詩はカラマス篇に力点を示しながら，まだ世に認められていない「草の葉」の成長発展を確信し，そのいや高き使命への委託の念を表明している。

僚友と愛人達への祝歌(キャロル)だけを地上に残す No Labor-Saving Machine,

冬の一夜，若き仲間との幸(しあわ)せな近寄りを楽しむ A Glimpse,

さらには，「手をとる友への小詩」(A Leaf for Hand in Hand), そして前出の Earth, My Likeness,

たくましい愛の精神を基礎にして築かれた理想社会，この世で最も堅固な新しい友愛の都市の建設が夢見られている I Dream'd in a Dream,

以下煩を避けてタイトルだけをあげると，「私がペンをとるのをどう思う」(What Think You I Take My Pen in Hand ?),「東部にまた西部に」(To the East and to the West),「時おり愛する者とともにいて」(Sometimes with One I Love),「西部の一少年に」(To a Western Boy),「おお，しっかりと根をおろし

た永遠の愛よ」(Fast-Anchor'd Eternal O Love !),「大衆の中で」(Among the Multitude),「おお，ときどき無言で訪ねて行く君よ」(O You Whom I Often and Silently Come),「私に似た，あの影よ」(That Shadow My Likeness)。

終りの「いま，人生の真つ盛り」(Full of Life Now) では建国83年にして40歳となった私が，一世紀あるいは幾世紀後の「草の葉」の読者たちとの合体を叫んでいる。

Full of life now, compact, visible,
I, forty years old the eighty-third year of the States,
To one a century hence or any number of centuries hence,
To you yet unborn these, seeking you.[52]

友人間の惜別の情，僚友を見出しえない人間の無価値なこと，この世で報いられない愛などありえぬこと，合衆国のだいじな目標としての素晴らしい友情による結束を主だったテーマに取り上げた詩人は，この詩篇を読む君の前で姿を消し，今や君自身に一体化するのである。

(2) その他の詩篇

"real love" は完遂し得られないものとして，鎮(しず)められ得ない欲求として，必然的に苦しみを伴うものである。Stephen E. Whicher は "Whitman's Awakening to Death" においてつぎのように述べている。

> The true ground of his pain is the recognition that *nothing* will pacify his desires, that love is necessarily something unaccomplished. Why this must be so becomes clear when we remember what Whitman meant by love. He has been shown at last what real love is only to find that it is something that cannot and must not hope for fulfilment.[53]

こうして情熱的な愛は，"Love is to lose." の宿命的なはたらきとなり，"real reality" の立場から生と死の究極的な姿を確認するのである。

第16代大統領 Abraham Lincoln は，無名の弁護士時代よりホイットマンの詩を愛読していたと言われ，この二人の世にも美しい理解と敬愛の関係は名詩 When Lilacs Last in the Dooryard Bloom'd を誕生させた。この詩は，1865年4月14日のリンカンの暗殺の後すぐに作られた。当時のアメリカにおいて最も美しく，最も賢かった魂のために，愛をもって綴られたのである。

Swinburne をして "the most sweet and sonorous nocturne ever chanted in the church of the world" と嘆賞させたこの偉大な挽歌 (threnody) においては，天上を行く西方の天体にリンカンの存在の意義を見出すのである。

O western orb sailing the heaven,
Now I know what you must have meant as a month since I walk'd
As I walk'd in silence the transparent shadowy night,
As I saw you had something to tell as you bent to me night after night,[54]　　(§ 8, 55—58)

ホイットマンは畏敬するカーライルの死をも，金星(ヴィーナス)をはじめとしてプレアデス星団，雄牛座などの天体の動きの中で実感している。Specimen Days にはこのカーライルの外に，1882年3月のロングフェロー，翌月のエマーソンの巨星の死を悼む章がそれぞれ設けられている。

あらゆる苦難を乗り越えて，ようやく船が港に近づいたとき，甲板に赤き血を滴(したた)らせて斃(たお)れた船長！ O Captain ! My Captain ! は彼の詩作中最も人口に膾炙(かいしゃ)している詩で，推敲(こう)も重ねられ，LG 中では珍しく stanza, meter, rhyme への工夫が施されている。格調の高い詩で，前の「ライラック・エレジー」と共に Memories of President Lincoln 篇に入っている。

自然界，人間界の諸現象を通して見られる生と死，破壊と創造のサイクルは，Kosmos をうたう詩人として忘れられない中心テーマである。実際，Leaves of Grass において，Louisa と Lincoln への敬愛，追憶に捧げられた諸作にたいし，一方の Drum-Taps 篇の43の詩が，その悽惨な戦場と清らかな月光ともどもに欠けていたとしたらどうであろう。戦闘の描写では，ホイットマンはロマン・ローランよりも渋く，トルストイやユーゴーに匹敵すると言われる。ドラクロアやゴヤに劣らない迫真力である。

弾丸が膀胱を貫通したため，何週間も小便の水溜りの中に寝ているニューヨークの男，……片腕を切り取られた後，血だらけになって地面に転がり，しかも無感覚に残った手でクラッカーをぼりぼり噛るブルックリンの若い男……極端な重傷者達が運搬車に担ぎ込まれるときに発する苦痛の叫び……見るに堪えない切断手術……悪鬼のように勇敢な突撃……肉屋の屠殺場を思わせる，野天に転がった二百人から三百人の哀れな人間達……形容もしえない頭や顔の恐ろしい傷，一面にひきむしられ，もの凄くもくづれゆがみ，ほろ穴があいた腹……。[55]

そしてこれら人間事象一切の上に，"Look Down Fair Moon" の明るい大きな月が，ときどき静かに輝きながら，慈愛深げにあらわれ，天国を思わす大空には澄んだ星が静かに光り，やがて消え失せる。

Look down fair moon and bathe this scene,
Pour softly down night's nimbus floods on faces ghastly, swollen,
purple,
On the dead on their backs with arms toss'd wide,
Pour down your unstinted nimbus sacred moon.[56]

このような光景のなかにこそ，南軍，北軍の数千の記されざる英雄，知られざる勇敢な行為があり，男性的肉体美や超俗，清廉の好標本が見出される。"The Bravest Soldiers" は埋葬も賞賛も与えられずに，母なる大地に崩れてゆく。

息子のように愛していた一兵士，今は冷い屍を戦場にさらすその若者に，二度と応答のない接吻をし，涙も言葉もない通夜，永遠性をもつ神祕の幾時間かを過す Vigil Strange I Kept on the Field One Night, また既出の As I Lay with My Head in Your Lap Camerado も「軍鼓のひびき」(Drum-Taps) に属する詩である。

(3) Whitman の人間関係

クェーカー教徒の両親のもとに育ち，10歳のときに同派の教会分立論者 Elias Hicks の説教を聞いて心に刻みつけたという宗教的背景をもつホイットマンの生涯で，僚友愛，しいては人間関係の観点から取り上げられるできごとの若干を考えてみる。

12歳（1831年）のとき *Long Island Patriot* 紙の植字工となり，ときおり感傷的な断片類を同紙にのせていた。これが一つの機縁となり，後年20～30歳代にわたって *Long Islander, Aurora, Tattler, Brooklyn Eagle, Crescent, Brooklyn Freeman* 各紙の記者，定期的寄稿者，編集者など，操觚業者の職についている。この間広汎な人間接触と人間観察の機会に恵まれた。乗合馬車の御者，渡船の船員など "powerful uneducated persons" への親愛の情はこの間に成長した。南北戦争中も *Armory Square Gazette* 紙などに寄稿している。

Specimen Days に，新聞関係の回想として Starting Newspaper の一章がある。また彼の愛友 Horace L. Traubel が印刷屋に働き口を見つけたとき，ホイットマンは先輩としてこれを祝い，「印刷屋での一年は大学での十二年より価値がある。」と激励したようである。

17歳（1836年）には故郷の Long Island にもどり，この後二年間，East Norwich その他の小学校教師として児童の心の友となる。彼の最初の小説と言われる，"Death in the School-Room" のスピリットからも窺われるように，体刑を施したことは一度もなく，子供たちと一緒に遊戯を楽しむ教師であった。厳格ではないが真面目で，権威のある教師であった。しかし拘束性の強い教師の職は元来彼には合わず，教え子の一人の語るところでは，「あながち失敗だったとはいえないが，確かに成功だったともいえない」教師であった。しかし一杯に帆を張って馳せて行く船を見て，はじめて不滅のライフ・ワークへの意欲を焚き付けられた彼にとっては，教職は最も良い経験の一つとなった。純朴な農夫，甲斐甲斐しい漁夫などの人間理解の場を提供してくれたからである。30歳ころのボヘミアンの彼がニューヨーク近辺で最も親しんだ友人たちもまた，フルトン渡船場の水先案内人やブロードウェイの乗合馬車の御者たちであった。

43歳を迎えた1862年の12月，前年4月に勃発した南北戦争に従軍していた弟 George の負傷の報に接し，Virginia 州 Fredericksburg にでかけた彼は，戦場の悲惨な光景に心を打たれ，ワシントンの陸軍病院にパートタイムの看護人となる。勝者も敗者も，北軍も南軍も一視同仁に扱った彼の看護生活は，前後20か月の長きにわたっている。この間病院を訪問すること 600 回，看護した傷病兵は 8 万人から10万人に上った。病

人もまた生き生きした人間を好むのである。訪問は，12時間から終日終夜のことも珍しくなく，危険な患者の場合はおおく夜通しで，このため頑健を誇る彼の身体に衰弱をきたすほどであった。

46歳，1865年の4月14日，ホイットマンを評して「ウム，何という男らしい人間だ」(Well, he looks like a man.) とつぶやいたリンカン，語らずして肝胆相照していたリンカンが暗殺された。

53歳，1873年の1月23日，45歳から兆候のあった中風症の発作におそわれ，5月23日，最愛の母がこの世を去るや，その臨終を看取った弟ジョージの家にそのまま寄寓し，以来ここカムデンは死にいたるまで詩人の幽棲の地となった。

病身のホイットマンの晩年にはイギリス人 Mrs. Anne Gilchrist の訪問をはじめ，年毎の A. Tennyson の短信，Robert G. Ingersoll 大佐，Horace L. Traubel との交友など，国の内外からの友情と好意が暖く彼を取り巻いてくれた。彼とトローベルとの間柄をダビデとヨナタンに譬える人もいる。

古い交友関係では，40歳代からの親友 William D. O'Conner，そしてカナダの人 Dr. Richard Maurice Bucke，内務省の書記時代に知り合った John Burroughs，あるいは「草の葉」第3版を刊行した書店の主人 C. W. Eldrige など。なおブルックリン以来30年の友であった William Cullen Bryant は，1878年6月に死んだ。

芭蕉の曾良におけるがごとき，Peter Doyle とのかわらぬ交友。ピーターとは1865年ころに知り合いとなった。彼はアイルランド生まれで鉄道馬車の少年車掌であった。

太陽のごとく健かで明るい彼の僚友愛の内竜骨！　これらの各一楽章が彼の自己強化をうながし，奴隷解放と連邦主義を基調としながら，平民詩人ホイットマンの一大交響曲を構成して行ったのである。

×　×　×　×　×

カラマス篇の独立詩の一つ，Salut au Monde！は13部，226行の長詩で篇中の王冠的存在といえよう。1856年の第2版の LG では "Poem of Salutation" として3番目にのっていた。彼の comradeship が，nationalism が，広大な世界観，世界愛の中でバランスを保っている。彼はこの世界愛の趣旨を徹底するために，最後の1881年の版では，合衆国に関連して叙述している詩行をかなりの数にわたって慎重に除去しているのである。

世界の各大陸，そこに住まう老若男女，そして濠州人が野馬を叱る声，スペイン舞踊の三弦楽器，ギター，カスタネットの音，テームズ川のどよみなどの世界の音声，各国の神話，伝説，教義，そして前にもふれた長崎の湾をもふくめた世界の諸海洋，河川，港湾，山脈，高峯，岬など地球上で見聞されるもろもろの事象が，壮大なスケールで列記されている。

さらにウイーン，セント・ペテルスブルグ，フロレンス，モスコーなど，世界の諸都市への呼びかけ，また囚人，傴僂，殺人者なども例外ではない各階層，各都市住民への呼びかけが行なわれる。北京，広東，カルカッタなどとともに，東京の蝟集する住民も本詩行中に加わっている。(§ 10, 142)

(I see the swarms of Pekin, Canton, Benares, Dehli, Calcutta, Tokio,)

イギリスの娘，ナポリの市民，韃靼人，スマトラ，ボルネオの住民など，世界各国民に敬意が表せられ，人間個々の存在の意義，生命の無窮性，地上に生存する一切の男女の等しく担うべき永遠の使命と，彼等の神聖な性格が説かれる。[57] そしてここにも日本の男女への一行がある。(§ 11, 189)

(You Japanese man or woman !....)

この Salut au Monde！の帰結としては，ホイットマンの精霊が濛気となり，風となり，水となり，あるいは鳥のごとくに，世界の各所に瀰漫し，翔り行き，「世界萬歳！」と祝福する。世界を真に愛する者は祖国を愛し得るものであり，祖国を真に愛する者は郷土を愛し得る者でなければならないと思われるが，ホイットマンがその郷土ロング・アイランドやブルックリンの風土，人間に示した深い親愛の情はすでに述べたとおりである。

〔結　論〕

結論に入るに先立って今少しくホイットマンと日本の関係についてふれてみたい。

「渡り鳥」(Birds of Passage) 篇の最後の詩，「プロードウェーの行列」(A Broadway Pageant) を読むと，

1860年（萬延元年），日本の国からはるばる渡来した新見豊前守一行[58]の日にやけた大和民族 (the tann'd Japanese from this island) は，彼にとってはアジア大陸そのものの出現 (the Asiatic continent itself appears) であったことがわかる。この東洋人こそ，「草の葉」においては，独創に富み，詩歌を遺す民族であり，不屈の魂をもつ民族である。

この「草の葉」の詩人を日本に最初に紹介したのは，大学生時代の夏目漱石の論文「文壇における平等主義の代表者ウオルト・ホイットマンの詩について」（明治25年）であるが，その他内村鑑三，高山樗牛，[59] 岩野泡鳴，[60] 有島武郎，野口米次郎，高村光太郎，富田砕花，白鳥省吾らの紹介で日本人に親しい存在となった。

なおホイットマンが我が国の民主主義思想および民衆詩，自由詩の運動に安定的でしかも決定的な影響を与えるようになったのは，我が国の文学界，思想界がトルストイの人道主義の感化を受けた大正初期以後のことである。有島武郎が大正９年10月，東大新人会で二晩にわたって行なった講演，「ホイットマンに就いて」では，絶対自由の境地で，ローファーとして果てしない彼岸を求めてさまよう，"the bard of personality"[61] としてのホイットマンが語られた。有島武郎著の「ホキットマン詩集」は叢文閣より，第一輯（定価１円90銭）が大正10年11月11日に，第二輯（定価２円）が一年以上遅れて大正12年２月13日に発行されている。しかも大正13年３月に第６版が出ているところを見ると，なかなかの売れ行きであったようだ。

それより先，大正３年４月５日には，内村鑑三，畔上賢造の共著，「平民詩人」（警醒社書店刊，定価50銭）が発行されているし，ホイットマンの生誕百年記念にあたる大正８年には，富田砕花による「草の葉」の完訳が企てられている。これは大正９年までに２巻が公刊された。なお，前の内村鑑三の「平民詩人ワルト・ホキットマン」は戦後の昭和22年７月１日に定価25円で同じ警醒社書店から発行されており，敗戦の悲況に沈む日本人のために飛躍発展への炬火を掲げた。また富田砕花氏も焦土の中から見事に開花した美しいライラックに刺戟されて，詩集「草の葉」（450円）を昭和24年５月31日，朝日新聞社より発行している。

（1） 愛の宗教性と救済性

Preface, 1855 "Leaves of Grass" によると，「詩人」たる者は，新しい聖職者として人間を導く師となり，過去と未来の兆候である現代の具象物に霊感を見出し，(They shall find their inspiration in real objects today, symptoms of the past and future....),[62] 各人が各人の導師となるような新しい秩序を樹立する者である。

> A great poem is for ages and ages in common and for all degrees and complexions and all departments and sects and for a woman as much as a man and a man as much as a woman. A great poem is no finish to a man or woman but rather a beginning.[63]
>
> （偉大なる詩は，時代から時代へ共有財産として引き継がれ，すべての階級や人種のために，すべての分野や宗派のために，そして男と同じように女のために，女と同じように男のために存在するものだ。偉大なる詩は，男や女にとって完成されたものではなくて，始まりを示すものなのだ。）

このために偉大な詩人は，船乗り，旅人，そして解剖学者，化学者，天文学者，地質学者，骨相学者，心霊学者，数学者，歴史家，辞書編集者の定めたきまりを守り，宇宙の偉大な特質を小手先ではなく，内部から湧きおこる完全な率直さ (candor) をもって支えなければならない。こうしてホイットマンの〈愛〉は，自然の規範的事象に注がれる愛，健全な子孫を後代にのこすための受精と身ごもりの amativeness，磁石のような牽引力で，共和国を，そして世界を至高の大義の下に一つに結合する comradeship (adhesiveness) とともに，デモクラシーの賛美歌のメロディーを奏でつつ，救済的愛，宗教的愛の段階に開眼する。

彼が特定の教義，宗派を無用とする点は，「ヤンキーの父」と言われた合理主義者 Benjamin Franklin に相通ずるものが見られる。すべての宗教に共通する根本的な信条を奉ずるという態度である。今日の我々から見れば，やがては40億人にもなろうとする世界全人類の希求する繁栄と平和に応えられる宗教こそ，当時のホイットマンが予見的に念願していたものと思考される。こういう彼の萬有神教徒としての宗教観を裏書きするものとして，Song of Myself の第41部より次の10行を引用してみよう。

> Out bidding at the start the old cautious hucksters,
> Taking myself the exact dimensions of Jehovah,

Lithographing Kronos, Zeus his son, and Hercules his grandson,
Buying drafts of Osiris, Isis, Belus, Brahma, Buddha,
In my portfolio placing Manito loose, Allah on a leaf, the crucifix engraved,
With Odin and the hideous-faced Mexitli and every idol and image,
Taking them all for what they are worth and not a cent more,
Admitting they were alive and did the work of their days,
(They bore mites as for unfledg'd birds who have now to rise and fly and sing for themselves,)
Accepting the rough deific sketches to fill out better in myself,
bestowing them freely on each man and woman I see,[64]　(1027—1036)

（手初めに，旧式でぬけめのない宣伝屋をおいこす高値をつけ，
みずからエホバの寸法を正確にとり，
クロノス，その子ゼウス，そしてその孫ハーキュリーズを石版刷りにし，
オシリス，アイリス，ベラス，梵天，仏陀の下絵を購(あがな)い求める。
紙ばさみにマニトを差し込み，アラーを本の一頁にのせ，十字架像を銅版刷りにする。
オーディン，恐ろしい形相(ぎょうそう)のメクシトリア，もろもろの偶像，化身なども一緒に。
一切をびた一文の掛け値なしに，あるがままの値うちで受け取り，
彼等がその時代時代に生き抜き，そのしごとを全うしたことを認める。
（今はひとりで立ち上がり，飛びかつ囀る小鳥たちが，まだ羽の揃(そろ)わないあいだ，彼等は小虫を運んでくれたのだった。）
未完成のまま神のスケッチを受けとり，私自身のうちでより良いものに仕上げ，私の出会う男女の一人一人に惜しげなく頒(わか)ちあたえる。）

詩人自身がひとつの〈宇宙〉であるばかりでなく，人間が自分の内部に〈至高者〉を意識するとき，宇宙には無数の「神」(the Supremes) が生まれるのである。ペルシアの詩人オマル・カイヤーム[65]の四行詩ルバイヤートにつぎの一聯がある。

至る処に，至高の力を感じ，
あらゆる国に，あらゆる民族に，
同一の人間性を発見する，
我は異端者なりとかや。

宗教方面におけるホイットマンの弁証法的思考と論理の展開過程は，南北戦争のくだりでもふれたように，破壊の神シヴァも保存の神ビシュヌも共在し，道徳も不道徳も隣り合って坐する群居の事象が見られるが，結局は開発の神梵天が究極的救済の手をさしのべ，生物，無生物がハーモニーの美音を鳴り響かせる東洋的解決と軌を一にする。

(2) 民主主義的愛

アメリカの文化の特性は，その一の相と多の相，すなわち画一性と多様性に着眼して理解することが捷径であることは，夙(つと)に指摘されているところであるが，[66] ホイットマンの「草の葉」はまさしくこの二つの相のコントラストであり，そのパノラマ的景観である。

一方には，風土人情，生活慣習の非常に異った北部と南部，また互に相違する法律をもち，内治の問題では判然たる優越権を有する各州の存在があり，他方には，局地主義(セクショナリズム)を打破した辺境(フランテイア)への前進があり，地形的には，眼界せましと緑草のつらなるプレーリー，3000哩以上の長さを誇るミシシッピー，ミズーリー両大河の悠揚迫らざる流れがある。この両河もまた相合してメキシコ湾にそそぐ。

Birds of Passage 篇のなかでも取り分け有名な Pioneers ! O Pioneers ! (1865—1881年) の第10聯においては，コロラド，ネブラスカ，アーカンソー，ミズーリーの諸州の原始林，巨大な峻峯，河川，懸崖，大草原，山径を開拓しながら，アメリカの北部からまた南部から，西部へ西部へと危険をおかしつつ進んで行く開拓者たちの同志的結合，そしてその結合の中で爆発する彼の人間愛，同胞愛がうたわれている。

O resistless restless race !
O beloved race in all ! O my breast aches with tender love for all !
O I mourn and yet exult, I am rapt with love for all,
Pioneers ! O pioneers ! [67]

ベンサムの功利主義の実現を期し，封建的特権階級の存続を許さないのが，平等単一なアメリカの民衆である。彼等の胸に一貫して流れるのは脈々たる僚友愛の情熱である。ここにこそアメリカ人の〈生の歓喜〉の秘密があり，希望に燃え立つ生活力の真の源泉がある。アメリカは人類の理想の電池であり，そこから〈民主主義的愛〉の電流が発せられるのである。

磔刑の姿をとる主にならって，罵声や嫉視の中に呻吟する同志とともに，国土も時代も超越した同胞愛をひろげてゆく To Him That Was Crucified (1860—1881年) は，つぎの一行で終わっている。

Till we saturate time and eras, that the men and women of races,
ages to come, may prove brethren and lovers as we are. (Autumn Rivulets)

同じ Autumn Rivulets 篇の中で上の詩につづく You Felons on Trial in Courts (1860—1867年) では，

Who am I too that I am not on trial or in prison ? とか，
Who am I that I should call you more obscene than myself ?

と自問するホイットマンの，兇悪犯，娼婦，不良児達への一体感から生ずる懊悩を見るのである。

だが，「私は善も悪もかばう。」と言いながら，「私自身が幸運そのもの」(I myself am good-fortune,— Calamus, Song of the Open Road, § 1, 4) とうたうことのできる彼の楽天主義の妙諦はどこにあるのだろうか。それは，〈善〉は僅少でも不死に向うものであり，〈悪〉は広大でも死滅し，消えてゆくものとする彼の信念，宇宙の思想にあるのだ。彼にとっては，〈老齢〉すら海洋にそそぐ大河口に見えたのである。彼の幸福感は，"I think no one was ever happier than I." と自負する「より高く」(Excelsior) [68] の詩においても遺憾なく発揮されている。

ホイットマンは，人の上に立たず，また人から離れて立つこともない〈小宇宙〉であった。彼にあっては，民主主義的愛の大前提としてまず個人の尊厳が確立されねばならない。Democratic Vistas において彼が説くところによると，個人主義 (Individualism) と愛国心 (Patriotism) は互に融合し，利益をあたえあい，相抱き，その両者からさらに偉大な第三のものを産み出すべきものなのである。宗教や聖書の神聖なる所以も君たち自身から成長するものであり，大統領は君たちのためにかのホワイト・ハウスにいるのだと訴える。画家によって描かれる中心人物の後頭から発する光輪は，ホイットマンの手によって，あらゆる男女の頭部から煌々と永久に放射されるのである。

× × × × ×

I will plant companionship thick as trees along all the rivers of
America, and along the shores of the great lakes, and all
over the prairies,
I will make inseparable cities with their arms about each other's
necks,
By the love of comrades,
By the manly love of comrades.[69] (For You O Democracy, 6—9)

〈神霊〉は一切の男女を自分の兄弟姉妹と化し，〈愛〉は森羅萬象の内竜骨となる。アメリカのあらゆる河川に沿うて，大湖水の岸辺に沿うて，また大草原上にあまねく友愛の樹木を植えつけようとするホイットマン！ 彼の時代は婦人参政権の問題にしてもやっと緒につきはじめた時代である。[70] フランクリン，トーマス・ペイン，リンカンらとともに，しかも強力に今日われわれの知る American Democracy なるものをきずいたホイットマン！

彼の詩群に接するとき，デモクラシー誕生の世界史的意義を思わずにはいられない。時代の偉大で新しい精神 (the immense and new spirit of the age) を体現し，アメリカを要約したような存在 (the compend of America) であった彼！ 彼が地方をうたうとき，それは同時にアメリカであり，地球であり，宇宙そのものである。排撃や破壊にあらずして受容と融合を強調した彼こそは，国際連合的機能の完遂を，やがては

世界連邦的なものの出現による，人類の平和と向上を待望した予言者的詩人のように思われる。

ホイットマンの神奥な〈愛〉の本質を解明することを志した本論考も，いたずらに「草の葉」全篇にみなぎる〈愛〉の glimpse を求めて，煩瑣な引用の重なりで終わった憾みなしとしない。再三繰り返されたように，"Leaves of Grass" は一行，一行が大思想を吐露する，帰結なき発端の詩集である。いな，終りも始めもないのが彼の語り伝えの真面目である。あるのは終未なき成長と永遠の前進である。永遠に解決のみられぬ問題の提起である。天国や地獄と同様に，〈愛〉は現在を中心点とする。「草の葉」を消化し，この詩集に新しい生命を見出し，あらたな詩を書き加えることこそ現代の，そして次代の読者や詩人の清新不断の責務である。

（注）

1) Mark Twain と Charles D. Warner 合作（1873）の長編諷刺小説のタイトル。
2) Floyd Stovall, *Walt Whitman : Prose Works* 1892, *Vol. II, Collect and Other Prose*, p. 370
3) 「ホイットマンの thanatopsis について」（苫小牧工業高等専門学校紀要第2号所載）
4) 1694年10月12日，大阪の御堂前花屋仁右衛門方の借り座敷でよまれている。
5) 永見七郎著，ホキットマン讃美（建設社，昭和16年刊），p. 46—47
6) V. K. Chari, *Whitman in the Light of Vedantic Mysticism*, p. 98
7) Ibid., p. 54
8) R. W. B. Lewis, *The Presence of Walt Whitman*, p. 4 ; Stephen E. Whicher, *Whitman's Awakening to Death*
9) Edward Carpenter の "Days with Walt Whitman"（川崎備寛訳「ホイットマン訪問記」，聚英閣，大正8年刊あり）の本文追補に，「草の葉」との類似章句の紹介がある。
10) 良き白髯の詩人ホイットマンは，知友 W. D. オコンナー (William Douglas O'Conner) をして "a Modern Christ" と評せしめている。
11) コンコードの超絶論者 H. D. ソロー (Henry David Thoreau) は，「彼こそ民主主義」(He is Democracy.) と言っている。
12) 清水春雄著，ホイットマンの心象研究（篠崎書林刊），p. 141—142
13) James E. Miller, Jr., *Walt Whitman*, p. 115
14) H. W. Fowler and F. G. Fowler, The Concise Oxford Dictionary of Current English, p. 318
15) Sp. camaradería, Sp. camarada=chamber fellow, Fr. camarade
16) Gay Wilson Allen, *Walt Whitman Handbook*, 1946, p. 17
17) 内村鑑三，畔上賢造共著，平民詩人（警醒社書店，大正3年4月5日刊），p. 22—23
18) Eloyd Stovall, *Walt Whitman*, p. 372
19) Harold W. Blodgett and Sculley Bradley, *Leaves of Grass*, p. 15
20) 1888年11月3日付の Note at End of Complete Poems and Prose に見える。
21) 1862年，当時陸軍中佐であった弟ジョージの負傷を看護するためワシントンに行ったホイットマンは，引き続き陸軍病院の特志看護卒となり，次には政府の役所の事務官として前後10年余りをワシントンの内外に滞在した。この間「草の葉」の増補，修訂も再三行なわれている。
22) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 711
23) 詩，および詩篇のタイトルの訳は，おおむね長沼重隆訳，草の葉（三笠書房刊）によった。
24) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 139—140
25) 太陽を愛し，野鴨の美音に聞き惚れ，荒野を駈けまわる兎を見る詩人，ワーズワスの喜びは，Resolution and Independence などの詩にみられる。また，つつましい花にも深い洞察の目を向ける詩人の姿は，つぎの二行によく示されている。（小川二郎著「文学論集」p. 62）

　　To me the meanest flower that blows can give
　　Thoughts that do often lie too deep for tears.
　（咲き出ずるいともつましき花も
　　時には余りに深くして涙もいでぬ思いをば
　　わたしに与えることができるのだ。）

26) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 49
27) Stovall, op. cit., p. 370
28) Louisa は彼にとって「神のような一元性をもった母性」であり，"the ideal woman, practical, spirit-

ual, of all earth, life, love, to me the best," と呼びかけられている。

既出の "the great cloud of my life" の字句は，友人 Peter Doyle に送った書簡に見えている。

29) 当時一般に異端視されていた「草の葉」を，新世界の待望していた文学だとして賞賛してくれた著名人としては，ほかに社会批評家 Henry David Thoreau, 超絶論者 Amos Bronson Alcott, ダンテ協会長の Charles E. Norton がいた。また洋の彼方の英国では，カーライル，ラスキン，テニソン等が比較的早く彼の天才と偉大を認めていた。

30) Floyd Stovall, *Walt Whitman : Prose Works* 1892, *Vol. I, Specimen Days*, p. 281—282

31) Miller, op. cit., p. 22

32) 清水春雄著，前掲書，p. 143—165

33) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 100

34) Ibid., p. 101

35) 1860年につくられた詩で，既述の1871年に Drum-Taps より移された二つの詩の一つ。もう一つは後出の，愛と戦場の sentiments をただよわせている "I Heard You Solemn-Sweet Pipes of the Organ" で，Sequel to Drum-Taps より移されたものである。

36) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 111

37) Ibid., p. 18

38) 1882年ホイットマンが63歳のおり，Osgood 社より出版された LG 第7版にたいして，ボストン地方検事局は猥褻(わいせつ)文学の故をもって州内の発売を禁止した。なお，A Woman Waits for Me の詩とともにこの詩の削除を命じたが，ホイットマンは断乎として応ぜず，結局フィラデルフィアの書店 Rees Welsh 社から第8版として発行された経緯はよく知られている。

参考のために Osgood 社宛の当時のホイットマンの手紙を引用する。

To James R. Osgood & Company

Camden New Jersey | March 23 '82

Dear Sirs

Yours of 21st rec'd, with the curious list—I suppose of course from the District Attorney's office—of "suggestions" lines and pages and pieces &c. to be "expunged." The list whole & several is rejected by me, & will not be thought of under any circumstances.

.....

Walt Whitman

(Edwin Haviland Miller : *Walt Whitman, The Correspondence vol. III* : 1876-1885, p. 270)

39) Clara Barrus によると，ハドソン河の Marlboro で友人 John Burroughs が観察した模様を聞いて作り上げた詩。MSS ではかなり加筆のあとが見られる。

40) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 401

41) Ibid., p. 497

42) Stovall, *Walt Whitman*, p. 388

43) Ode to Psyche に次の数行がある。

They lay, calm-breathing on the bedded grass ;
Their arms embraced and their pinions too ;
Their lips touch'd not, but had not bid adieu,
As if disjoined of soft-handed slumber,
And ready still past kisses to outnumber
At tender eye dawn of aurorian love. (M. R. Ridley, *Keats' Craftsmanship*, p. 200)

44) LG の第3版では，No. 28, O Living Always, Always Dying の題名でのっている。

45) Blodgett an Bradley, op. cit., p. 129—130

46) Basil De Sellincourt, *Walt Whitman, A Critical Study*, p. 207—211

47) MSS には，本詩にない次の二行を含んでいる。

And now I care not to walk the earth unless a
friend walk by my side,
And now I dare sing no other songs only those
of lovers,

48) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 123

49) Ibid., p. 129

50) Children of Adam では I Am He That Aches with Love が本詩と対照的に唯一の3行詩である。この外の詩篇は，By the Roadside 篇の終りの方に To Old Age と Thought と題する二つの詩が1行で，2行の詩は Inscriptions に二つ，By the Roadside に八つ，Songs of Parting に三つ，Sands at Seventy に四つで，合計17となる。いずれも所感ないし総括の趣をもつ詩となっている。

参考のために15篇（補充篇一つを含め），402の詩（Fancie at Navesink を八つの詩として）より成る LG を，10行以下の短詩という範疇により行数で分類すると次の表になる。

行数＼篇名	In.	Ch.	Ca.	Bi.	Se.	By	Dr.	Me.	Au.	Wh.	Fr.	So.	Sa.	Go.	Ol.	合　計
1						2										2
2	2					8						3	4			17
3	3	1	2			2			1				2	2	4	17
4	2	1	3	な	な	4	1	1	3	2	1		8	1		27
5	3	2	4			3	5		1	2			9	2	2	33
6	2		4				2	1	3	2		1	12	3		30
7	3	1	7	し	し	1	4		2	1		1	5	4		29
8	2	1	1			2	2		1		2	1	4	5	1	22
9	1		3			1	1			1			5	2	1	15
10			5			2	2		1	3		3	3	2		21
合　計	18	6	29			25	17	2	12	11	3	9	52	21	8	213

Abbreviations:

In. Inscriptions
Ch. Children of Adam
Ca. Calamus
Bi. Birds of Passage
Se. Sea-Drift
By By fhe Roadside
Dr. Drum-Taps
Me. Memories of President Lincoln
Au. Autumn Rivulets
Wh. Whispers of Heavenly Death
Fr. From Noon to Starry Night
So. Songs of Parting
Sa. Sands at Seventy
Go. Good-Bye My Fancy
Ol. Old Age Echoes

10行以下の詩は213で全詩数の半分以上に及ぶ。このうち1～3行の詩は前述せるように Thought その他，所感とか概括する趣の詩となっている。11行以上の詩は19の11行詩をふくめて189となる。また100行以上の長詩は，既述の1346行の Song of Myself，335行の By Blue Ontario's Shore 以下23あるが，そのうち九つの詩が Calamus 篇にある。

なお，10行以下の詩を前表で見ると，5行の詩が33（15%）で一番多く，篇別で見ると，Sands at Seventy が52（24%），つぎが Calamus で29（14%）の順である。これら長短さまざまの詩が，ホイットマンの感懐をあるいは縷々と説述し，あるいは簡潔に決定打を放つ趣を見せて適当に各篇に配分されていることは，「草の葉」の醸す自然で偉大な魅力の大切な一要素と言えるのである。

51) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 131

52) Ibid., p. 136

53) Lewis, op. cit., p. 15

54) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 331
苫小牧工専紀要第2号，p. 37

55) これらの胸痛む光景は，Specimen Days 中の Hospital Scenes and Persons, Two Brooklyn Boys, A Night Battle, Over a Week Since, Bad Wounds—the Young などの諸章に詳述されている。取り分け A Glimpse of War's Hell-Scenes における，Upperville 付近での反乱軍の捕虜虐殺とそれにたいする北軍騎兵隊の報復行為のシーンは，正に一幅の地獄絵である。しかもホイットマンは，戦争のあらゆる不気味な激情はその何十倍，いな何百倍のものであると記述している。

56) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 320—321

57) Calamus 篇の独立詩,「職業に寄せる歌」(A Song for Occupations) に次の3行がある。

The wife, and she is not one jot less than the husband,
The daughter, and she is just as good as the son,
The mother, and she is every bit as mueh as the father. (§ 2, 33—35)

58) 新見正興(まさおき)は (1822—1869) 江戸末期の外国奉行。アメリカ船で渡米した最初の遣米使節 (1860) 中の正使。当時勝海舟も護衛艦咸臨丸(かんりん)の船長として,片道 (江戸,サンフランシスコ間) 35日を要してこれにしたがった。咸臨丸は江戸幕府がオランダから買い入れた木製軍艦であった。新見正興の乗艦はアメリカの軍艦ポーハタン号で日米修好通商条約批准書交換のために渡米せるもの。咸臨丸には福沢諭吉も通訳として乗組んでいた。

一行81名は批准書をワシントンの政府に渡してから,フィラデルフィアよりカムデンに渡り,アムボイを経て,汽船アリダ号に乗ってニューヨーク埠頭に上陸したのであった。

59) 明治31年の「ホイットマン論」がある。

60) 明治40年に「草の葉」の部分訳を発表した。

61) Starting from Paumanok (§ 12. 164) に「個性の詩人」(the bard of personality) の句が見えている。

I will effuse egotism and show it underlying all, and I will be the
bard of personality,

なお,この有島武郎の講演については,研究社発行の「英語研究」(1967. 7), p. 42 の小玉晃一「W. Whitman, E, A. Poe と日本文学」で詳述されている。

62) Stovall, op. cit., p. 335

63) Ibid., p. 334

64) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 75

65) Omar Khayyám (1040 ?—1123) は Khorassan 州 Nishapur に生まれ,天文学・数学・医学などで当時を代表する大家。堀井梁歩訳「波斯古詩留盃邪土」がある。Rubáiyát は叙情的な古代ペルシアの詩を集積したもの。pessimism によって着色された hedonism の卒直な表現が見られる。19 C. 中葉,英詩人 Edward Fitzgerald の英訳によりヨーロッパに紹介される。

66) 石田憲次著,アメリカ文学の研究 (研究社刊), p. 1—84

67) Blodgett and Bradley, op. cit., p. 230

68) Ibid., From Noon to Starry Night 篇, p. 478—479

69) Ibid., p. 117

70) 全米にこの問題が登場したのが彼の死の2年前,1890年という状態。婦人参政権はワイオミング州が最初で,1890年に同州が合衆国に編入されるにおよんで全米の問題となり,1893年コロラド州がこれになった。

ホイットマン年譜ならびに主要文人消息略表

1819年 (5月31日, Walt Whitman, Long Island の West Hills に生る。)
John Ruskin (2.8—1900.1.20), Herman Melville (8.1—1891.9.28), George Eliot (11.22—1880.12.22) 生る。

1821年 Charles Pierre Baudelaire (4.9—1867.8.31), Feodor Mikhailovich Dostoevskii (11.11—1881.2.9) 生る。
John Keats (1795.10.31—2.23) 死す。

1822年 Percy Bysshe Shelley (1792.8.4—7.8) 死す。

1823年 (4歳—5月27日に一家は Brooklyn に転住する。)
太田南畝 (蜀山人) (1749—) 死す。

1824年 George Gordon Byron (1788.1.22—4.19) 死す。

1825年 (6歳—1830年までブルックリンの小学校に通う。成績は中位。)

1827年 William Blake (1757.11.28—8.12), 小林一茶 (1763—12.19) 死す。

1828年 George Meredith (2.12—1909.5.18), Henrik Ibsen (3.20—1906.5.23), Dante Gabriel Rossetti (5.12—1882.4.10), Leo Tolstoi (9.9—1910.11.20) 等生る。

1830年 (11歳—小学校を退き,弁護士 James B. Clark の事務所のボーイとなる。)

1831年 (12歳—この年の夏, *Long Island Patriot* 新聞の植字見習工として勤める。以降1843年迄,印刷,編集の仕事に従事する。)

良寛 (1757.12—7.12), 十返舎一九 (1765—8.7) 死す。

1832年　Björnstjerne Björnson (12.8—1910.4.26) 生る。
Johann Wolfgang von Goethe (1749.8.28—3.22), Walter Scott (1771.8.15—9.21), 頼山陽 (1780.12.27—9.23) 等死す。

1834年　(15歳—身体の発育が良く，堂々としてすでに成人の風があったといわれている。)
William Morris (3.24—1896.10.3), 福沢諭吉 (12.12—1901.2.3) 生る。
Samuel Taylor Coleridge (1772.10.21—7.25), Charles Lamb (1775.2.10—12.27) 死す。

1836年　(17歳—この年の夏，ロング・アイランドの East Norwich で小学校の教師となり，以降1838年迄の2年間児童に接する。)

1837年　Algernon Charles Swinburne (4.5—1909.4.10) 生る。
Alexander Segreevich Pushkin (1799.6.6—2.10) 死す。

1838年　(19歳—1839年まで Huntington の *Long Islander* 紙を編集する。)

1840年　(21歳—この年の秋，Van Buren の大統領選挙のため遊説する。冬になって再び Trimming Square などで教壇生活に入る。)
Emile (Edouard Charles Antoine) Zola (4.2—1902.2.29), Thomas Hardy (6.2—1928.1.11) 生る。

1841年　(22歳—5月に New York に行き，*New World* 紙の印刷の仕事をし，*Democratic Review* 紙のために執筆をはじめる。)
Mikhail Yuriyevich Lermontov (1814.10.15—7.27) 死す。

1842年　(23歳—*Aurora* 紙，*Evening Tattler* 紙の編集に携わる。)

1844年　Paul Verlaine (3.30—1896.1.8), Friedrich Nietzsche (10.15—1900.8.25) 生る。

1846年　(27歳—3月より1848年の1月迄 Brooklyn の *Daily Eagle* 紙の編集に携わる。)

1848年　(29歳—2月11日，*Crescent* 紙の創刊のため New Orleans に弟 Jeph(erson) を伴って出掛け，5月27日に同地を去り，Mississippi と Great Lakes 経由でブルックリンに帰る。9月9日には *Freeman* の主筆となる。)
滝沢馬琴 (1767.6.9—11.6), Emily Jane Brontë (1818.7.30—12.19) 死す。

1849年　August Strindberg (1.22—1912.5.14) 生る。
Edgar Allan Poe (1809.1.19—10.7) 死す。

1850年　(31歳—1854年迄の4年間，印刷所，文房具店，無所属記者，住宅の投機，建築等の仕事に携わる。)
Guy de Maupassant (8.5—1893.7.6), Robert Louis Stevenson (11.13—1894.12.3) 生る。
William Wordsworth (1770.4.7—4.23), Honoré de Balzac (1799.5.16—8.17) 死す。

1854年　Oscar O'Flahertie Willis Wilde (10.16—1900.11.30), Jean Nicolas Arthur Rimbaud (10.20—1891.11.10) 生る。

1855年　(36歳—7月4日，ブルックリンの Rome Brothers より自費出版による *Leaves of Grass* の初版 (95頁，1,000部) が刊行される。7月11日，父 Walter 死去。7月21日に Emerson よりの書翰あり。)

1856年　(37歳—この年の夏，*Leaves of Grass* の第2版が出る。初版の不評判に比し，このときは1,000部が間もなく売切れた。しかし，悪評は依然繰り返された。)
George Bernard Shaw (7.26—1950.11.2) 生る。
Heinrich Heine (1797.12.13—2.17) 死す。

1857年　(38歳—この年の春より1859年の夏ころまで，ブルックリンの *Times* 紙を編集する。)
Joseph Conrad (12.3 (か 6)—1924.8.3) 生る。

1859年　Arthur Conan Doyle (5.22—1930.7.7), 坪内逍遙 (5.22—1935.2.28) 生る。

1860年　(41歳—5月に Boston の Thayer and Eldridge 社より，新たな作詩125篇を加えて「草の葉」の第3版が出る。)
Anton Pavlovich Chekhov (1.17—1904.7.2) 生る。

1861年　(42歳—4月12日，南北戦争勃発し，10月30日，弟 George 出征する。)
内村鑑三 (2.13—1930.3.28) 生る。

1862年　(43歳—12月，弟ジョージの負傷を聞き Virginia 州 Fredericksburg に赴き，二週間陣営にとどまる。)
森鷗外 (1.19—1922.7.9), 新渡辺稲造 (8.3—1933.10.15), 岡倉天心 (12.26—1913.9.2) 生る。

Henry David Thoreau (1817.7.12—5.6) 死す。

1863年 (44歳—Washington, D. C. にとどまり，陸軍主計局にパートタイムの仕事をしつつ，諸病院に兵士を見舞う。)

1864年 (45歳—6月，病を得てブルックリンに帰る。)

Nathaniel Hawthorne (1804.7.4—5.19) 死す。

二葉亭四迷 (2.28—1909.5.10) 生る。

1865年 (46歳—1月24日，内務省書記に任命され，ワシントンに戻る。4月14日，リンカン暗殺され，5月 *Drum-Taps* を印刷。6月30日，内務長官 James Harlan により解任されたが，翌7月1日付で司法省に採用される。)

Arthur Symons (2.28—1945.1.22), William Buttler Yeats (6.13—1939.1.28), Rudyard Kipling (12.30—1936.1.18) 等生る。

1866年 (47歳—William D. O'Conner が *The Good Gray Poet* を出版する。)

Romain Rolland (1.29—1944.12.30), H(erbert) G(eorge) Wells (9.21—1946.8.13) 生る。

1867年 夏目漱石 (1.5—1916.12.9), 幸田露伴 (7.23—1947.7.30), 正岡子規 (9.17—1902.9.19), 尾崎紅葉 (12.16—1903.10.30) 等生る。

1869年 (50歳—Anne Gilchrist 夫人ロゼッティ版を読み，詩人に愛情を抱く。)

馬場孤蝶 (11.8—1940.6.22), André Gide (11.22—1951.2.19) 生る。

Charles Augustin Sainte-Beuve (1804.12.23—10.13) 死す。

1870年 (51歳—「草の葉」の第5版を electrotype にする。)

Charles Dickens (1812.2.7—6.9), Alexandre Dumas, Sr. (1802.7.24—12.5) 死す。

1871年 (52歳—7月 Alfred Tennyson よりの懇切な消息がとどく。9月3日付でギルクリスト夫人より最初の love letter がとどく。ワシントで「草の葉」第5版が出る。)

高山樗牛 (1.10—1902.12.24), 国木田独歩 (7.15—1908.6.23), Theodore Dreiser (8.27—1945.12.28), 土井晩翠 (10.23—1952.10.19), Stephen Crane (11.1—1900.6.5), 田山花袋 (12.13—1930.5.13) 等生る。

1872年 (53歳—6月26日，Dartmouth College の卒業式で "As a Strong Bird on Pinions Free" を読む。ワシントンで「草の葉」第6版出る。)

島崎藤村 (2.17—1943.8.22), 樋口一葉 (3.25—1896.11.23), 佐々木信綱 (6.3—1963.12.2) 等生る。

1873年 (54歳—1月23日，中風の発作あり。5月23日，母死亡。母の臨終にかけつけ，そのままニュージャージー州カムデンの弟ジョージの家に寄寓する。)

岩野泡鳴 (1.20—1920.5.9), 與謝野寛 (鉄幹) (2.26—1935.3.26), Walter de la Mare (4.25—1956.6.22), 姉崎嘲風 (7.25—1949.7.23), 泉鏡花 (11.4—1939.9.7) 等生る。

1874年 (55歳—6月，"The Prayer of Columbus" を *Harper* 誌にのせる。7月1日，代人を委託していた書記の職を退く。)

William Somerset Maugham (1.25—1965.12.16), 高浜虚子 (2.22—1959.4.8), Robert Frost (3.26—1963.1.29), 上田敏 (10.30—1916.7.9) 等生る。

1875年 長谷川如是閑 (11.30—)，野口米次郎 (12.8—1947.7.13) 生る。

1876年 (57歳—Camden にて，「草の葉」の第7版 (Author's Centennial) が出る。)

1877年 (58歳—1月28日，フィラデルフィアで Thomas Paine についての講演をする。)

1878年 Carl Sandburg (1.6—)，有島武郎 (3.4—1923.6.9), Upton Beall Sinclair (9.20—)，寺田寅彦 (11.28—1935.12.31)，與謝野晶子 (12.7—1942.5.29) 等生る。

William Cullen Bryant (1794.11.3—6.12) 死す。

1879年 (60歳—4月14日，ニューヨークで "Death of Abraham Lincoln" の最初の記念講演をし，6月には1876年以来滞米していたギルクリスト夫人の帰国を見送る。9月には，はじめて西部に行き，カンサス，コロラド等を訪ね，往復一万哩余の行程を楽しむ。)

正宗白鳥 (3.3—1962.10.28), 長塚節 (4.3—1915.2.8), Robert Lynd (4.20—1949.10.6), 永井荷風 (12.3—1959.4.30) 等生る。

1881年 (62歳—4月15日，ボストンでリンカンについての講演をする。)

Thomas Carlyle (1795.12.4—2.4), Fiodor Mikhailovich Dostoevskii (1821.11.11—2.9) 死す。

1882年 (63歳—ボストンの地方検事局が，Osgood 社に猥褻文学として「草の葉」の発売中止を命じたので，フィラデルフィアの Rees Welsh 社より第8版 (今日の「草の葉」の基礎となっている版) を刊

行。)

Virginia Woolf (1.25—1941.3.28), 斎藤茂吉 (7.27—1953.2.25) 生る。

Henry Wadsworth Longfellow (1807.2.27—3.24), Ralph Waldo Emerson (1803.5.25—4.27), Henry James, Sr. (1811.6.3—12.18) 等死す。

1883年　(64歳—Dr. Bucke の *Walt Whitman* が出る。)

志賀直哉 (2.20—), 高村光太郎 (3.13—1956.4.2), 阿部次郎 (8.27—1959.10.20) 等生る。

Edward Fitzgerald (1809.3.31—6.14), Ivan Sergeyevich Turgenev (1818.11.9—9.3) 死す。

1885年　(66歳—11月29日，ギルクリスト夫人逝く。)

佐藤清 (1.11—1960.8.17), 北原白秋 (1.25—1942.11.2), (Henry) Sinclair Lewis (2.7—1951.1.10), 武者小路 実篤 (5.12—), D(avid) H(erbert) Lawrence (9.11—1930.3.2) 等生る。

Victor Marie Hugo (1802.2.26—5.22) 死す。

1886年　(67歳—メリーランドの Elkton, カムデンなどでリンカンについての講演を行なう。)

石川啄木 (2.20—1912.4.13), 谷崎潤一郎 (7.24—1965.7.30), 萩原朔太郎 (11.1—1942.5.11) 等生る。

1888年　(69歳—4月新たな発作あり。11月は重体。*November Bough* 印刷される。)

里見弴 (7.14—), T(homas) S(tearns) Eliot (9.26—1965.1.4), 'Katherine Mansfield' (10.14—1923.1.9), Eugene O'Neill (10.16—1953.11.27), 菊池寛 (12.26—1948.3.6) 等生る。

1889年　(70歳—5月31日，カムデンの住民たちが詩人の誕生パーティを催す。「草の葉」第9版の300部の限定出版。これは1908年，D. Appleton 社より発行される。)

柳宗悦 (3.21—1961.5.3), 三木露風 (6.23—1964.12.29), 室生犀星 (8.1—1962.3.26), 久保田万太郎 (11.7—1963.5.6) 等生る。

1891年　(72歳—*Good-Bye My Fancy* 印刷される。2月付で "death-bed edition" (1889年の版を数えるかどうかで9版とも10版とも言われている。)

竹友藻風 (9.24—1954.10.7), 久米正雄 (11.23—1952.3.1), Henry Miller (12.26—) 等生る。

1892年　(3月26日の午後6時42分，カムデンにて72歳10か月の生涯を閉ぢる。3月30日，ハーレー墓地 (Harleigh Cemetery) に埋葬される。会葬者3,000人。ハーネッド，インガソル等追悼の言葉を述べる。)

堀口大学 (1.8—), 西条八十 (1.15—), 芥川竜之介 (3.1—1927.7.24), 佐藤春夫 (4.9—1964.5.6), Pearl Sydenstricker Buck (6.26—), 吉川英治 (8.11.—1962.9.7), 藤森成吉 (8.28—) 等生る。

Alfred Tennyson (1809.8.6—10.6), John Greenleaf Whittier (1807.12.17—9.7) 死す。

(記)

1) 略表のつもりでいながら，乗り掛かった船ということで，かなりの人名を収録した。また，精確を期するために判明したものは出生，死亡の月日を記載した。

2) 各年度それぞれ日本人，外国人の区別なく，出生，死亡の月日の順で配列した。

3) 見出しの年度と重複したところは出生，死亡とも年は省略し，月日のみを記入した。

4) 参照した資料は，Emory Holloway : *Walt Whitman*, Blodgett and Bradley, op. cit., 有島武郎訳前掲書，研究社：英米文学辞典，「英語研究」，明治書院：現代日本文学大事典，Encyclopedia Americana, 富山房：国民百科大辞典等である。

5) ホイットマンとほぼ生存年代を同じくした文人としては，上表よりメルビル (—1年)，ラスキン (+8年)，テニスン (+10年)，ホイッティア (+12年)，G. エリオット (−12年)，ドストエフスキー (−13年)，ロングフェロー (+12年，−10年)，エマソン (+16年，−10年) 等が挙げられる。(+はホイットマンの出生前，−は死亡前の観点からつけたもの。)

このうちホイッティアは，真摯一徹な性格から，「草の葉」の初版を火中に投じたりしているが，ホイットマンと同じクエーカーの家庭に生れ，奴隷廃止論者であり，Songs of Labor の詩集などあり，ホイットマンとの因縁浅からざるものを感じさせる。

メルビルはその敢然たる変化に富む精神遍歴において，ホイットマンと比較されている。(Stephen E. Whicher の *Whitman's Awakening to Death* を参照。) また，ドストエフスキーとホイットマンにおける，作品と生涯を通じてみられる根本的類似——愛の清浄化と救済の作用，万人の心のうちに潜む brotherhood などを説いているものに，Perry D. Westbrook の *The Greatness of Man* (*An Essay on Dostoyevsky and Whitman*) がある。

昭和43年12月2日受理